桃太郎伝説～俺は日本一～

アメリカ兎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔々あるところに――これは、そんな当たり前から始まる昔話。仲の良い老夫婦が拾った桃から生まれた桃太郎の物語。

旅のお供に浦島太郎、豆の木が特徴な家に住むジャック、赤ずきんを食べた人食い狼を連れて桃太郎は鬼ヶ島を目指す。

道中に立ちはだかる強敵と困難の数々を仲間達と共に乗り越えて手にするは日本一の称号。

果たして鬼退治を無事に達成することが出来るのか――！

※諸注意

まともじゃありません

目次

誕生！　桃太郎！～俺より強い奴に会いに行く～ ―――――― 1
旅立ち編：奴の名は人食い狼 ―――――― 8
旅立ち編：旧友との再会！ ―――――― 17
旅立ち編：怪奇！　港町に潜む奴！（前篇） ―――――― 25
旅立ち編：怪奇！　港町に潜む奴！（後編） ―――――― 34
旅立ち編：やるべきこと。成すべきこと ―――――― 42
竜宮城編：奴を討て！　その名は乙姫！
目指せ雲の上！ ―――――― 49
巨人の屋敷で大暴れ ―――――― 58
お宝奪って大脱走！ ―――――― 66
竜宮城を目指して激戦へ ―――――― 75
激突、竜宮四天王！ ―――――― 83
深海の決着 ―――――― 92
竜宮城の主、乙姫との決戦！ ―――――― 102
天竺編：奴が来る！　その名は三蔵法師！
次なる目的地へ ―――――― 111
辿り着くは極楽浄土！　ここは天竺 118
決戦に備えて豪遊！ ―――――― 127

来るなら来てみろ三蔵法師！　―　135
極めろ必殺のスープレックス！　144
おまえどの面下げてここに来た！　152

誕生！　桃太郎！～俺より強い奴に会いに行く～

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは山へ氷の精霊シヴァ狩りに行き、経験値と報酬を貰い、時折町で手編みの笠を売りさばいて生計を建てていました。

おばあさんは川で洗濯を。家事一切はおばあさんがやっていました。

そんな老夫婦は仲が良く、そんなある日のことです。

「おじいさんや。そろそろ薪が足りなくなってきたよ。山で精霊シヴァを狩るだけじゃなくて芝を狩ってきてはくれないかね」

「もう少しでレベルが上がるんじゃ。せめて次のレベルになるまで待ってくれんかのう」

「そうは言ってもねえ、薪が無かったらお米は炊けないし、お風呂も沸かせないよ。だからどうかお願いします」

「なら仕方が無い。明日山へ芝刈りに行ってくるよ」

「はいよ、お願いしますよ」

翌朝、おじいさんは山へ芝刈りに。おばあさんは川へ洗濯に行きました。

おじいさんが山で芝刈りをしていると獣の気配。山では危険が一杯です。おじいさんは鈴を鳴らして熊の対策をすることを怠っていました。ですが今のおじいさんのレベルであれば熊程度、恐れる事はありません。

しかし現れたのは隻眼の熊でした。これは山を縄張りとする金太郎一家の買う熊、これでは流石のおじいさんも堪りません。

「く、熊じゃー！　お助けー！」

おじいさんは逃げ出しました。一目散に走り去ります。その昔、メロスと呼ばれ名高い俊足で親友セリヌンティウスの為に三日で王様を改心させたというおじいさんの足の速さには流石の熊も諦めました。

おばあさんが川で洗濯をしていると一羽のツバメが大きな桃を持ってきました。町で貧しい人々に食糧や宝石を配っていると噂のツバメです。老夫婦のことを知り、親切心で大きな桃を苦労して運んできました。

「おばあさん、おばあさん。私は町で貧しい人々に食糧や宝石を配っているツバメです。貴方にこの桃を授けようと思って持ってきました」

ツバメはその桃を川へ降ろします。すると川の流れに運ばれた桃はどんぶらこ～どんぶらこ～と流れて行きました。

洗濯ものをしていたおばあさんはこれに怒り心頭。

「やいすずめや」
「ツバメです」
「つばめ？　なんだいビームでも撃ちそうな名前をして」
「私はそれと無関係です」
「それはそれとして、お前さんのせいで大切な洗濯物が汚れてしまったではないか。どうしてくれる」
「それは大変申し訳ありませんでした」
「いいや、許さん。お前の舌を切ってやろう」
「お、お助けー！」
　ツバメは必死に逃げようとしました。そもそも飛んでいるツバメをおばあさんがどう捕まえようと言うのでしょうか。意外！　それは髪の毛！　その昔この辺り一帯の山を仕切っていた山婆として名前を轟かせていたおばあさんはツバメをあっという間に捕らえて舌を切ってしまいました。ですが折角の贈り物、おばあさんはその桃を家に持って帰ることにします。
　家に帰ると、先におじいさんが帰っていました。
「おかえり、ばあさんや。これはまた大きな桃だねぇ」
「おじいさんや、この桃を切ってくださいな」

「よし、任せておきなさい」
　おじいさんがその桃を切ると、なんということでしょう。桃の大きな種が入っているはずの場所に小さな赤ん坊がいるではありませんか。匠の粋な計らいに、老夫婦は驚きを隠せません。
「桃から赤ん坊が。おーよしよし」
「おばあさんや、この子をわしらで育てようじゃないか」
「そうですね、おじいさん。桃から生まれたからこの子の名前は桃太郎にしましょう」
「せっかく桃から生まれたからピーチにしようと思ったんじゃがなぁ」
「おじいさん、この子は男の子ですよ。それにその名前はなんだか攫われそうな気がします」
　こうして桃から生まれた桃太郎はおじいさんとおばあさんに大切に育てられることになったのです。

　――それから月日は流れ。桃太郎はたくましく育ちました。友達だっています。
　そんなある日のこと。大きく育った桃太郎はこんなことを言い出しました。
「おじいさん、おばあさん。鬼を退治しに行こうと思うのです」
　鬼退治をする、そう言いだして二人は大層驚いたそうな。悪事の限りを働く鬼たちの

潜む鬼ヶ島までの道のりは険しく、困難が立ちはだかります。かつておじいさんも挑み、大切な親友セリヌンティウスを失って断念しました。その苦い経験からおじいさんは止めようと考えますが、自分達が手塩に掛けて育てた桃太郎ならきっと――そんな思いを胸に、桃太郎に期待をよせます。

「桃太郎、鬼を退治に行くというんだね」

「はい、おばあさん」

「ギッタギタのメッタメタにかい」

「はい、おばあさん」

「見敵必殺（サーチアンドデストロイ）！　塵芥も残さずに鬼をせん滅するって言うんだね」

「はい、おばあさん」

「よろしい、完璧（パーフェクト）だ桃太郎！　奴等を絶滅させて鬼という種族の未来を断絶するんだ！」

「はい、おばあさん！」

「それじゃあきび団子を作ってあげるからちょっと待ってなさい」

「はーい、おばあさん」

　きび団子が出来上がるまでの間、桃太郎はおじいさんに呼ばれて部屋に招かれました。

「桃太郎、手ぶらでは心細いだろう。なにか武器を持っていくといい」
「はい、おじいさん」
「ひのきの棒なんてどうだい」
「せめて短剣くらいください」
「はっはっは、冗談だよ。私がかつてこの島国に来た時に知り合った友人から渡されたこの刀を渡そう」
「この刀はなんですか、おじいさん」
「これは勢州千右門尉村正」
　妖刀として有名な野太刀を渡された桃太郎は息を飲みました。昔おじいさんがやんちゃをしていた頃があったとおばあさんから聞いていましたが予想外です。
「良いか、桃太郎。村正には呪いが掛けられておる」
「はい、おじいさん」
「善悪相殺。敵を斬ったならば味方をも一人斬らねばならぬ恐ろしい呪いが込められておる。心せよ、扱いに用心して村正を使うのだぞ」
「はい、おじいさん」
「それとは別にこのひのきの木刀も渡しておこう。仕込み刀だ」
「はい、おじいさん」

話が終わり、おばあさんが桃太郎にきび団子を渡します。身支度を整えた桃太郎は二人に別れの言葉を告げました。

「おじいさん、おばあさん。鬼を見事に倒し、私は日本一の称号と共に帰ってくる事を誓います。それまでしばしの別れです、それでは行ってきます」

「桃太郎、気をつけるんだよ」

「村正の呪いを忘れるでないぞー」

こうして桃太郎は鬼退治に出発しました。

旅立ち編：奴の名は人食い狼

まずは金太郎一家が束ねる山々を越えなければなりません。しかし、それも以前の話。金太郎も桃太郎が生まれた年に息子が生まれて今となっては先代のような非道な行いをする者たちもおりません。しかしそれでもかつての配下であった熊達は森の中を徘徊しています。

「もーもたろうー桃太郎ー、お腰に付けたーきび団子ー。一つー私にギヴミープリーズ！　やらん！」

桃太郎もご機嫌で歌を歌っていました。熊や他の獣達が襲って来ません。木刀を振り回し、謎の歌を口ずさみながら意気揚々と歩く青年の姿があれば誰しも近寄りたいとは思わないでしょう。

桃太郎が山の中腹に差し掛かった辺りで一頭の熊と出会いました。それは紛れもなく熊です。頭に三日月の兜を被った隻眼の熊は先代金太郎の舎弟である証。

「おや、熊だ」

「ああ、貴方は桃太郎。ご無沙汰しております」

「今日はどうなされた」

熊の手には貝殻の指輪がありました。それはとてもきれいな物で、とてもではありませんが熊の持つべきものではありません。
「実はこれを落とした少女がいたのです。その子を探しているのですが中々見つからなくて困り果てていました。彼女に声を掛け、渡そうとしたのですが……「いやぁぁぁ熊ぁぁぁ！」と半狂乱状態で絶叫しながらサブマシンガンを乱射して走り去ってしまったのです」
「それはお気の毒に。その少女の特徴はなにかありませんか」
「赤いずきんをかぶっていました。ランチバスケットを持って」
桃太郎はお世話になった熊の事を思い、鬼退治の旅路ですが少し寄り道をすることにしました。
「熊さん、私も貴方の手伝いをしましょう。きっと彼女も困っているはずです」
「ありがとう桃太郎。しかしなにか心当たりでも？」
「そんなものは、ない。彼女の行きそうなところとか行動から思い当たりませんか」
「そういえばランチバスケットを持っていました。どこかに向かっていたようにも思えます」
二人はハッと思い当たります。山の外れにあるお菓子の家に一人の老婆が住んでいることを。

「きっとあそこに行ったのでしょう。早速行ってますか」
「うむ」
「では私の背中に乗りなさい桃太郎。かつて先代金太郎様に馬としての稽古をされていた私の脚ならばすぐに到着します」
「では失敬」
桃太郎が四つん這いになった熊の背中に跨ります。
「……やはりなにか違う。くっ、私の背中にしっくりくるのは先代金太郎様だけだと言うのか……！　ガオオオオオオオオオ！」
熊は叫びました。桃太郎を乗せて違和感と共に走ります。先代の金太郎もまた、おじいさんと共に鬼退治に向かった歴戦の勇者でした。熊の片目もまたその時に失われた物です。あの日の雪辱を忘れたことはありません。

そして、あっという間に到着したお菓子の家。煙突からはもくもくと煙が上がっていました。
「壁はクッキー、煙突はなにで出来てるんだ?」
「トッポです」
「なら最後までチョコたっぷりじゃないのか」

「……チョコだけ食べたとか」
「おのれ腐れ外道！　許すまじくそばばぁ！　てめえの血は何色だぁ！」
桃太郎は激しい憤りを感じながらクッキーの扉を開けます。内装までもがお菓子一色の家に甘い香りが腹を空かせました。
するとマシュマロの枕に布団をかぶって寝ている人影があるではありませんか。この家に一人で住んでいると言う老婆でしょうか？　桃太郎は声を掛けました。
「おばあさん、貴方は煙突のトッポをチョコだけ食べると言う非道な行いをしましたね！」
「ぬぁんだってぇ、聞こえないねぇ？」
「おいババァ！　貴様のそのでかい耳は飾りか！　流行りの犬耳バンドで萌え萌えの女子力アップ狙ってるのか！　キモい！」
「聞こえないってんだろ！」
「聞こえてるじゃねーか」
桃太郎は私情を置いておき、まずは赤いずきんの少女について尋ねました。
「おいババァ。赤いずきんの女の子が此処に来なかったか」
「ぬぁんだってぇ、よく聞こえないねぇ？」
「おいババァ！　この流れさっきもやったぞ！　空気読めよ！　ＫＹ！　調子に乗って

場の空気を冷ました挙げ句次から距離を取られるタイプだな！　だから老後にぼっちでここで暮らしてるんだな！　ざまぁババァ！」

「てめぇこらぁ表出ろやぁごるぁ！」

布団から飛び起きた老婆の影が桃太郎に襲いかかります。咄嗟に木刀で防いだ桃太郎でしたが、そのままクッキーの壁を壊して外まで転がりました。

なんということでしょう、老婆だと思っていた相手はなんと狼でした。金太郎一家から追い出され、それ以来ならず者として生きてきた人食い狼です。そのお腹は丸々と太っていました。

「お前は！　まさか人食い狼！」

「てめえは先代の右腕！　おのれ、お前のせいで俺はこんな辺鄙な場所でゴミを拾い、雑草を抜き、不法投棄するけしからん連中を追い出すのが日々の日課となった！　許さねぇ！」

「山が毎日人知れず綺麗になっていたのはお前のおかげだったのか！　ありがおー」

「非っ常に申し訳ないが媚びてもかわいくない！」

「お前には地獄すら生ぬるい……！」

「ふん、だがまずはそっちの人間からだ！　オレサマ、オマエ、マルカジリ！」

桃太郎はかぶりを振り、木刀を支えにして立ち上がります。

「お前のようなババァがいるか！」
「人食い狼です桃太郎」
「なに、じゃあババァじゃないのか！　おいこら人食い狼！　お前お菓子の家のババァを知らないか！」
「ふぅん、かわいい孫娘と一緒に俺の腹の中だ！」
「……念のため聞くがお前は雄か」
「おう」
「男なのに帝王切開……」
「――――」
　ボソリと呟いた桃太郎の一言に一瞬だけ静まり返りました。
「さぁ行くぞ人食い狼！　かかってこい！　お前の腹を斬り裂いて赤いずきんのかわいこちゃんと外道ババァを助けてやる！」
「お、お前あのばあさんに何の恨みが……」
「やかましい。腹を斬らせろ」
「ひぃ、なにこの人間怖い！」
　熊は思います。桃太郎と人食い狼が戦えば、実力の差は歴然。今は落ちぶれているとはいえかつては同じ釜の飯を食った仲です。熊は人食い狼に情けを掛けました。

「桃太郎、ここはひとつ穏便に。我々の用があるのは赤いずきんの女の子と腐ったババアだけ。奴と戦う理由はありません」
「……確かに。熊さんの言う通りだ。命拾いしたな人食い狼」
「だ、だだだだが俺はただで返す気はないからな！」
「なら俺のきび団子をやろう。それでどうだ、悪い話じゃないだろう？」
「美味そうだな……よし分かった！　少し待ってろ」
「何処に行くんだ？」
「吐いてくる」
　※大変ショッキングな音声と映像の為、赤ずきんと熊の華麗なカバディをご想像してお楽しみください※
「助けていただきありがとうございます。一時はどうなることかと」
「いえいえ、お礼はいりませんよ。ちょっとずきんが溶けてるお嬢さん。それよりこの貝殻の指輪を落としたのは、貴方ですよね」
「まぁありがとう。突然声を掛けられてビックリして逃げてごめんなさい熊さん。お詫びと言ってはなんだけれど踊りませんか？」
「喜んで、マドモアゼル」
「イヤー！」

「なんで!?　桃太郎ナンデ!?」
「お前に明日を生きる資格はねぇ！　トッポのチョコだけ食うような外道に情けなし！　チェストー！」
「煙突の話!?　あれは違うんじゃ！　重ねたチョコワをコーティングしただけで決して！」
「なんだ、違うのか……ちっ、切り損ねた」
「桃太郎怖い……」
「そういえば熊さんや、金太郎は？」
「ああ、金太郎ですか。休暇取ってベガスに飛びましたよ」
「では帰ってきたら鬼退治していると伝えてください。それでは」
「お気をつけてー」
　おや？　人食い狼が付いてくるではありませんか。
「どうした人食い狼。腹を裂かれたいのか」
「そんな趣味はない！　お前と一緒に居た方が面白そうだと思ってな。きび団子も美味かった。俺を旅のお供にしてくれ」
「別にいいが、きび団子はあまりやらないぞ。俺が食う分が無くなってしまう」
「恩に着る。かたじけない。コンゴトモ、ヨロシク」

こうして人食い狼が旅のお供につくこととなりました。

旅立ち編：旧友との再会！

桃太郎と人食い狼は山の頂上から一面に広がる草原を見降ろしていました。
「あそこにでかい木が見えるが？」
「ああ、あれは豆の木だ。あそこの近くに俺の友人が住んでいる」
「それにしたってでかい豆の木だ……雲を突き破ってる」
「まさかあの日、酒に酔ってボール一杯の枝豆を植えたのがあそこまで成長するとは思いもしなかった。行こうか」
「あんた何してんだ……」
二人は下山して草原を駆け抜けます。それはさながらサラブレットのように。

一人の青年が畑を耕して汗を拭っています。彼の名はジャック。桃太郎の旧友です。
「ふぅー、今日もやるだけやったなぁ……ん？」
遥か遠方から何かが走ってきます。
木刀を頭上で振り回し、奇声を発する人間と、その隣に狂犬病にでもかかったように狂った二足歩行の狼がこちらに向かってくるではありませんか。さしものジャックも

これには大変驚きました！

「チィ！　世間は世紀末か！　これだから俗世間と俺は関わりたくないんだ！」

ジャックは急いで納屋から弓矢を取り出し、腰に猟銃をぶら下げて狙いを定めます。そして放たれた矢は真っ直ぐ人間へ飛びますが、驚く事にそれを木刀で弾き落としました。

「キエエエエエエ！　ウラアアアアアアアア！　モッゲロッポッピッパアアアア！」

「ヒョーホホホホホホ、ペッポルパアアア！」

「桃太郎じゃないか！　久しぶりだな！」

「ＨＥＹ！　ジャック！　この野郎元気そうじゃないか！」

「何故あれで分かるのアンタら!?」

人食い狼の理解の範疇を超えたコミュニケーションに彼は人類の恐怖を垣間見ます。

二人はがっちりと固い握手を交わし、力コブが盛り上がりました。

「……どうした？　ＣＩＡのデスクワークで鈍ったか？」

「誰がお前なんかに……！」

「ん？」

「――――はっはっは、分かった分かった！　降参だよ！　南米密林で狩猟民族と地球

外生命体の儀式から生きて帰った勘は鈍ってないようだな桃太郎！　で、そっちの犬はなんだ。差し入れか？　犬は好きだが赤いのが良かったな」
「狼だよ！　人食い狼だよ！」
「獣姦？」
「言ってない！」
「あながち間違ってない。穴なだけに」
「最低な会話だ！」
　桃太郎と人食い狼はジャックの家に招かれて一息入れます。なにせここまで来るだけでも相当な長旅でした。
「それでどうしたよ、お前がわざわざここまで足を運ぶなんて珍しいじゃないか」
「ああ、実はな。鬼ヶ島に向かっているんだ」
「ッとだんな!?」
「逆から言葉を発するな」
　桃太郎冷静なツッコミからジャックに説明します。
「ほ、本気なのか……鬼ヶ島に行くなんて」
「ああ。鬼退治をしようと思っている」
「無理は止せ、桃太郎！　先代、先々代。かつて数多の英傑達が鬼ヶ島に挑んだ！　だが

誰も……」

（生きて帰ってこなかったのか……）

人食い狼は山でボランティア活動をしながらみすぼらしく生きてきました。世間様の、特に人間の歴史なんて知る由もありません。

「分かってる！　だけどもう満足できないんだよ！　狩猟民族と地球外生命体の儀式から帰って来て、俺は自分より強い奴と戦いたくてワクワクが止まらないトゥギャリたいんだ！」

「お前この間の呟きツールで『この呟きが１０００ＲＴされたら鬼退治行くわｗｗｗそこまでされないだろ回避余裕ｗｗワロタｗｗ』とか呟いて余裕の一万ＲＴされたからだろ」

「俺をなぜフォローしたぁぁぁぁぁぁ!!」

「回ってきたんだよぉぉぉぉぉ!!!」

ジャックは別アカウントで三回ＲＴしてました。拡散希望のタグまで付けて。

「まぁそれで鬼退治に行こうと思うんだ」

「面白そうだな、俺も行こう」

（さっきの流れはなんだったんだ!?　人間って怖い！）

「じゃあ今日は泊まっていくといい。明日は港に向かって浦島の奴にも声を掛けないと

な」
「浦島……生きていたのか……」
「……ああ。少し痩せたみたいだけどな」
　その日はジャックの家に一泊して、翌朝。朝食を済ませた三人は港に向かって歩き始めます。
「桃太郎。浦島ってどんな奴なんだ?」
「ああ、お前は知らなかったな人食い狼。俺達太郎一族の中でも特に武道に秀でた」
「ちょっと待った」
「太郎一族というのはだな」
「待ってください桃太郎さん!　お願いします!」
「はっはっは、俺は鬼ヶ島に行くんだ。止まりはしない」
「言葉が通じない……!　なんで鬼ヶ島に行くんですか!」
「話聞いてなかったのか?　俺より強い奴にアイニードユー」
「という名目で実際は調子に乗った結果」
「アイウォンチュー」
　――太郎一族。代々語り継がれてきた日本に伝わる伝説の勇者たちの子孫。
　桃太郎。金太郎。浦島太郎。そしてウルトラの星に生きるタロウ。彼等は様々な国

の人々と出会い、友情を深めて鬼ヶ島を目指しました。しかし、誰一人無事に帰ってきた者はいません。

鬼はそれほどまでに恐ろしく強大な敵なのです。

「俺の爺さんの爺さんの曾爺さんの親戚の従兄弟の兄弟の弟の嫁の親戚のお隣さんも」

「もう赤の他人でいいよそれ！」

「鬼ヶ島に行って帰ってきた」

「凄いなお隣さん！　誰も生きて帰って来なかったのに！」

「ん？　何を言ってる。鬼ヶ島は観光名所だぞ？」

「どうなってんのこの国!?」

「勘違いしてるようだから説明してやろう。鼻の穴かっぽじってよく聞け犬っころ」

「人食い狼だ！」

「じゃあコロでいいな。おいでーコロ」

「ぶっ殺すぞアンタら!?」

「ああん、ぶっ転がすぞテメエ！」

「キャウンキャウン……」

日本観光名所・鬼ヶ島――大海原にポツンと浮かぶ陸の孤島。侵入者抹殺自動警備システム小鬼（オーガ）で夜も安心して観光スポットを巡る事が出来ます。

なんといっても一番の目玉は鬼ヶ島の管理システムである《鬼》に挑戦すること！管理者と生身の肉弾戦で触れ合おう！

※　当社は一切の損失・損害・肉体改造・紛失・盗難・恋愛・色恋沙汰・ほとばしるエナジーによる責任を持ちません。彼女募集中。

リア充爆ぜろ。

「と、いうのが日本の名所百景案内に載っている鬼ヶ島だ」

「マジで載ってる!?」

ジャックに草原を転がされた人食い狼は青い顔でパンフレットを読んで驚愕していました。

「住所と電話番号まで載ってる……あれ?」

「どうしたコロコロ」

「どこの少年向け雑誌だ！」

「いや、カーペットとかに使う……」

「そっち!?　いや、桃太郎さん。一つ思ったんですがね」

「どうしたロコロコ」

「パッチョンボーでもねぇよ!?　これ、旅するくらいなら飛行機で行った方が」

二人はやれやれと呆れながら鬼ヶ島のページの隅っこを指さしました。

注意――鬼ヶ島の上空は、なんかこうとにかくマジやばい。超ヤバイ。何がやばいってとにかくアレがやばいんだって、まじあり得ないから飛行機とかで来るとＤＩＥされちゃうのでお勧めしません。

「分かったな」

「分かりたくないけど分かりません」

「あと金が無い」

「そういうことか……！」

人食い狼は涙を拭えませんでした。

旅立ち編：怪奇！　港町に潜む奴！（前篇）

桃太郎一行は大草原を進み、海に向かいます。目印はジャックの家の隣に生えている豆の木。道に迷うような事もありません。

段々と磯の香りが鼻につくようになってきました。港が近いのでしょう。

「浦島は元気にしてるだろうか」

「いつだったか魚を買いに行った時はまだ元気だったが……今年の初め辺りから少し様子がおかしかったな」

「またあぐらで空中浮遊でもしてたのか」

「いや、それは昔からだろう。浦島が、というよりは港町の様子だ」

ジャックが言うにはなんだか漁師たちの顔がのっぺりとしていたというのです。

「巷の港では整形がブームなんだろう」

人食い狼がやけに静かです。心なしか顔色も悪いではありませんか。どうしたのでしょう。

「大丈夫か、人食いコロ」

「腹の調子でも悪いのか、コロ食いコロ」

「アンタら俺の名前をコロで定着させるな！　コロコロうっさいよ！」
「じゃあどうしたんだよ人食い狼コロボックル」
「こんな妖精嫌すぎる」
　ジャックの素直な一言に人食い狼の心は傷つきました。すっかり弄られキャラが定着してしまっています。なんとかそのイメージを払拭しようと頑張ろうとしますが、やはり調子が悪いようでした。
「それでどうした」
「いや、磯の香りに混じって」
「すまん、屁をこいたのは俺だ」
「ジャックウウウウウウ!!!」
　人食い狼が白目を向いて泡を吹きながら倒れます。痙攣して動かない獣を二人は担いで港に向かいました。何はともあれ人食い狼は休息させなければなりません。
「まったく足手まといな」
「そう言うなジャック。俺が旅を始めて一日目で仲間になってくれたいい奴なんだから」
「お前がそういうなら悪くは言わないさ。俺も楽しませてもらってるからな」
「そうかそうか。それに、いざという時は非常食になりそうだし」

「ハッハッハ！　相変わらずお前のジョークは厳しいな桃太郎！」
「えっ」
「えっ」
「……あ、あぁ。うん、悪い」
「お、おう……」
港に到着した頃には微妙な気まずさを残して桃太郎は浦島を探し始めました。
ジャックはその間に人食い狼と共に宿を探します。
「チョリーッス、今晩宿いいっすかー」
「勘弁」
一件目は問答無用に断られました。
「チーッス、今晩宿空いてますかー」
「残念」
二件目は都合がつかなかったようです。
「チャーッス、今晩どうですかー」
「あらいい男……」
三件目で遂にジャックはナンパに目的がすり替わりました。――偶々同じ道で出会った桃太郎に腹パンされてデートを断念することになります。

「宿を探してくれないかジャック？」
「お、おうふ。分かったから俺のボデーにいい拳をくれるのはやめてくれ……浦島は見つかったか？」
「いやぁ、駄目だ。漁師を片っ端からちぎっては投げちぎっては投げ聞いたんだが」
「投げんな！」
「あ、人コロ狼。起きたのか」
「もう狼でいいです……だからコロだけはやめてください……！　お願いします、お願いします……！」
とうとう人食い狼の心が折れました。泣いて土下座しながら懇願します。さすがの二人もこれはやりすぎたな、と反省しました。
「そうだな、悪かったよ。……えーっと」
「俺も調子に乗って悪かったな。……あー」
「「確か……犬っコロ」」
「俺の心はそろそろ限界かもしれない……」
旅立ち二日目にして人食い狼の心は複雑骨折を極めそうになってます。桃太郎とジャックは改めて謝罪して浦島を探しました。宿は後回しです。
「すいませーん、ちょっといいですかー」

「アーイ」
「コノヘンデー、浦島ー、ミカケマセンデシターー？」
「シラナイネー、ワタシラ、ゼンゼンヨー」
「アリガトネーー！」
「イイエーー！」
「……ふう、ここも駄目か」
「なぜ片言で聞いた桃太郎！」
　しかし聞けども聞けども一向に浦島の手掛かりは掴めませんでした。
　夕方になり、桃太郎はまた明日探すことにして宿を探します。しかし、どういうことでしょうか。行く宿は全て三人を門前払いするのです。これは怪しいと思い、桃太郎一行は原因を探りました。
「狼、お前のせいかもしれないな」
「なぜにそうなりますか桃太郎さん」
「普通に考えてみろ。二足歩行する破れたジーンズ穿いた狼を連れた一行を誰が泊めると思う」
「ついでに言うならお前の名前、人食い狼だもんな」
「そ、それならアンタ等もだろう！　木刀と刀を持った男と弓矢と猟銃持った男を誰が

泊めようと言うんだ！」
「猟師とか」
「ハンターかな」
「俺が狩られる側だった……！」
　次の宿では物は試し。狼を宿の前に番犬として置き、二人は宿の主と交渉を始めました。それからしばらく中では口論が起きていたようですが、やがて二人が出てきます。
「ああ、どうでしたか桃太郎さん、ジャック」
「ふう、中々いい拳持ったおっちゃんだった……あれは効いたな。ワカメサーベル」
「あの美人の奥さんの使う昆布ウィップも強敵だった」
「話し合いはどうしたぁあああああ!!」
「肉体言語！」
「駄目だった」
「あの山に帰りたい……」
　ぺっぺっ、と二人は口から塩を吐いていました。
「ところで狼。もう体調は大丈夫か」
「まさか俺の屁であそこまでダメージ食らうとは心外だったぞ」
「あれはジャックの屁がトドメでしたが、実は港から変わった臭いがしていたのです。

例えるなら……頭に直接響くような甘い香り、というか名状しがたい香りというか」
「分からん」
「さっぱりだ。狩猟民族の体臭は鼻が曲がるほど臭かったが」
「懐かしいな、宇宙から成人式に来た狩猟民族。あの日の修学旅行はスリリングだったな……」
「思い出話に華を咲かせるのはまた後にしようぜ、桃太郎。とにかく今は宿を探さないと」
　そう言って気を取り直した三人は、物陰から呼び止められます。すっかり日が暮れてしまい、誰がそこに居るのかなど分かりません。ですが名前を呼ぶと言うことは……。
「まさか、そこにいるのは浦島か！」
『……桃太郎、こっちだ。早く来い』
「いや、まだお前が浦島だと決まったわけじゃない。本当に浦島なら証拠を見せてくれ」
『証拠？　証拠と言われても、お前の名前を呼んでるのが何よりの――』
「どうした桃太郎。向こうの通りに向かって声を出して」
「どうかしましたか桃太郎さん」
『……なにをすればいい……！』
　心なしか人影の声が悔しそうに震えていました。桃太郎は本当に旧友、浦島であるか

どうかの為に得意技をリクエストしました。
「もし、お前が本当に浦島ならばジャックの放つ矢を受け止めてそれを同じ速度で俺に投げ返し、それを更に投げ返した矢を掴み取って上空高くに飛んでからへし折り、地面に瞬間移動できるはずだ！」
「よし来た、任せろ桃太郎！　行くぞ浦島！　懐かしの技を見せてくれ！」
『ちょ、ちょっと待っ……！』
ヒュン！　――ギャアアアアア！
通りの向こうから悲鳴があがります。暗闇の中では流石に浦島も失敗したのでしょうか、桃太郎とジャックは慌てて駆け寄りました。
「ジャック、お前どこを狙った！」
「野暮なこと聞くなよ桃太郎！　勿論眉間を狙ってやったぜ！」
「殺す気満々じゃねーか!?」
ですが、三人がそこで見たのは浦島ではありません。月明かりに照らされるその人影はまるで半漁人のような化け物だったのです。
「コ、コイツは……！」
「桃太郎さん、ジャック。どうやらこの港には」
「なんて不味そうな魚だ……どら猫も食わないだろうなこんな不細工な魚」

「アンタ等ちったぁ危機感持てよオイィ！」

旅立ち編：怪奇！　港町に潜む奴！（後編）

狼の叫びに二人がさりげなく、それでいてわざとらしく聞こえるような舌打ちをしました。それに言葉を返す前に三人の周囲を囲う半漁人の数々。
「しまった、囲まれたか！」
「まさか此処は――！」
「もう化け物の」
「競り市場だったのか！」
「海に沈めていいですか桃太郎さん！」
「やってみろ！　俺の華麗な一人シンクロナイズドスイミングで夜の漁に出ている人から銛を投げつけられてマグロと共に４２，１９５ｋｍ泳ぎ切ってサメとマンボウとシャコとワニと仲良くなった俺に海など第三の故郷にすぎない！」
「ハイスペック過ぎるこの人……！」
陸に上がるなりシャコは美味しくいただきました。
半漁人達は何か言葉をブツブツと繰り返しながら包囲網を狭めていきます。桃太郎とジャックはそれぞれの得物を構えました。

「ところで狼。俺に良い考えがあるんだが聞いてくれ」
「どうせ俺に囮になってくれと言うんでしょう貴方のことだから！」
「……さぁ来い半漁人共！　この木刀でたたきにした後にわさび醤油をかけてそこらの野良猫に食わせて餌付けしたら港を野良猫の無法地帯にしてやる！」
「ヒューッ！　さすが桃太郎、この極悪人！」
「照れるだろう、よせやい！」
「ウボアアアアアアアア！」
狼が状況に耐え切れず、奇声を発しながら前足の爪で早速半漁人の群れに飛び掛かります。次々と硬い鱗を斬り裂く切れ味は抜群でした。その活躍には桃太郎とジャックも驚きます。
「血気盛んだな、狼！　こういう時は頼りになるぜ！」
「まったくだな！　チェストォー！」
「おらおらぁ、散弾の味はどうだぁ半漁人めぇ！　くたばれ化け物ォー！」
三人は包囲網を突破して走りました。ですが港町はどこも半漁人だらけです。これはどうしたことでしょうか？
昼間はあんなにも良い人たちが住んでいた港町は夜になると化け物の巣窟となっているではありませんか、果たして本当にここで浦島と再会は果たせるのか桃太郎は不安

になってきます。しかし、いや、そんなことはない！　旧友の生還を信じて桃太郎、ジャック、狼の三人は港町を走り続けました。
「くそったれ、キリがねぇ！　おい桃太郎、ここは三手に別れよう！　落ち合う場所はあの灯台でどうだ！」
「東方公共降下部隊帝国!?　あそこまで行くのに今からどれだけの長旅を」
「俺の過去を思い出せるなよこんな時にぃ！　そういうお前だって元コマンドー」
「違う、レスキュー部隊だ！」
「ああ敵以外のな！　とにかくあそこの灯台で落ち合おう！」
「分かった。狼、気を付けろよ！」
「アンタらに心配はいらなさそうだ」
　仮に人類が絶滅してもこの二人なら生き残りそうですが、狼は四本足で野生に戻って屋根を駆けあがりました。ジャックは猟銃に弾を込めながら走り、桃太郎は木刀の鞘を抜いて真剣を構えて振り返ります。
「当方に迎撃の用意あり。冥土の土産に死に方用意せよ！」
　大勢の半漁人がペタペタと地面に水滴を垂らしながら桃太郎に殺到しました。この人海戦術を前にしては桃太郎も一溜まりもありません――しかし、その鮮血は半漁人の群れから噴き出ていました。

「チェエエイヤァァァー！　ソイヤッソイヤッ！　はぁーどっこいしょ、ふぅ……。オリャアアア！　チェストオオオ！」

月明かりの下に桃太郎の巧みな剣捌きが奔ります。次々となます切りにされていく同胞を見て半漁人たちも敵わないと悟ったのか尻込み始めました。

「ケェエエエエエエエエ!!」

攻勢一転、今度は桃太郎が刀を振り回しながら半漁人達を追いかけ回します。その昔おばあさんから教えてもらった言葉は「見敵必殺（サーチ・アンド・デストロイ）」そしてもう一つ。

「フハハハハハハァ！　力こそが正義（パワー・オブ・ジャスティス）!!　良い時代になったなぁ貴様らぁ、ヒャーッハッハッハ！　雑魚と書いて魚かぁ！　ウヒョー！」

それから三十分後に桃太郎は目的を思い出しました。

「あ、やべ。灯台行かないと」

――桃太郎と別れたジャックは真っ先に灯台に向かいました。そして誰よりも先に到着し、そこでも半漁人たちの襲撃に遭います。桃太郎と狼の為にもそこを死守しようとその場を掃除しました。

口に猟銃をくわえて手動で弾を装填していきます。後ろ腰の緊急用のナイフを振り回しながら弾を込めた猟銃を撃ちました。銃の反動が心地良いではありませんか。

「ンッン〜、実に良い。銃はいいなぁ兄弟ぃ！　ギャーハッハッハ！　そらそら逃げろ逃げろ！　血肉をぶちまけろやぁああ！　さわんな！　鉛玉をお前の身体にシュウウーーー！　超、エクスタシー！　イエエアアアア！」

ジャックの周囲は死屍累々、半漁人たちはやがて灯台から離れていきました。

「ふう、まったく。けしからんな最近の魚は。どうせ俺に酷いことでもする気だったんだろうがそうはいかん。俺は薄い本を読む専門だからな！」

こっそりと地下に隠しているのは桃太郎にも秘密です。

ジャックはそれからすぐに桃太郎と合流しました。しかし、いつまで経っても狼が来ないではありませんか。

「遅いな、アイツ」

「まさか食われたか？」

「ははっ、まさかぁ。俺達の非常食だ」

「俺は食わないからな桃太郎」

「チッ」

その頃の狼はなんと半漁人とは違う化け物に襲われて逃げ惑っていました。

触手が伸び、家屋を薙ぎ払います。狼はそれを素早く避けますが次々襲いかかる触手

を避けるので精一杯でした。
「ワウン！　くそ、こんな奴がいるなんて俺聞いてない！」
狼が窮地に陥る中、桃太郎とジャックは仕留めた半漁人を焼いて食っていました。見た目とは裏腹に中々の美味に頬張っていきます。
そんな事は知らずに狼は身体を半漁人に捕らえられました。爪で振り払うも眼前には巨大な吸盤と触手が迫っています。絶対絶命！　そう思えたその時、謎の人影が触手を斬り裂きました。
「桃太郎さん！　――じゃない、のか？」
「ここは危険だ」
「貴方は一体」
「自己紹介は後だ。早く逃げろ」
狼は灯台へと急ごうとして、振り向くとその人影は驚くべきことに素手で次々半漁人と触手を切り裂いています。その場から一歩も動かずに化け物を退ける姿はまさに大往生。　そして狼が灯台に命からがら辿り着くと、山積みにされた半漁人の屍が香ばしい匂いを漂わせているではありませんか。
「おふぉかったは、おおはみ」
「食うか？　美味いぞ」

「俺の生命の危機は食欲に劣るのか……美味っ！」
「で、何かあったのか？　遅かったみたいだが」
「道にでも迷ったのか。まったく、俺が屁でもすればよかったな」
　ハハハと笑いあう二人に狼は謎の人影の話をしました。それに驚くのも一瞬、相槌を打つと半漁人を食い始めます。
「そいつは多分浦島だ。生きてたんだな」
「当然だ。アイツは修学旅行で金太郎と一緒にエジプトでゾンビの群れと戦って写真に収めようとしたカメラマンから逃げ切った男だからな」
「ゾンビはどうした!?」
「一人で全滅させた」
　その時の金太郎は金銀財宝を持って逃げるだけでなく退路の確保も忘れないぬかりの無さでした。
　ザッ……、気配のない足音に桃太郎は木刀を抜き、ジャックは猟銃を構えます。
「貴様……何者だ」
「久々の再会を血で祝う気か、桃太郎」
「その声は……ジャック！」
「応！」

ヒュン！　パシッ、ヒュバッ！

「とう！」

投げ返された矢をすかさず桃太郎が人影に投げると、キャッチした姿が月を背負って飛び上がりました。矢の折れる音と共に姿が掻き消えます。

「き、消えた……」

「浦島、浦島じゃないか！　この野郎、元気そうじゃないか！」

「ははは、お前こそ。相変わらずじゃないか。それにしてもジャック、私の眉間を狙うとは相変わらず良い腕をしてるな」

「そっちこそ、腕は鈍ってないようだな」

桃太郎、ジャックが浦島の肩を叩きました。

「ま、マジでやったよ……例の技」

旅立ち編：やるべきこと。成すべきこと

合流した浦島に桃太郎は半漁人を頬張りながら事情を話しますが、その表情は浮かない様子でした。
「言いにくい事なんだがな、桃太郎」
「なんだ？」
「お前達の食べているそれ。港の人達だ」
オロロロロロロロロロ――三人が夜の海面を覗き込んで何やら奇怪な声を発しています。そして浦島と視線を合わせた時には涙目になっていました。口元を拭いながら。
「ハァ、ハァ……何があったか話してくれるか浦島」
「……話せば長くなる。あれは三十六万」
「なげぇ」
「いや、一万四千……まぁいい。全ては私が亀を助けたのが始まりだった。
――あの日、釣り竿片手に砂浜を歩いていた私は、三匹の豚に囲まれて踏んだり蹴ったりカバディされていた一匹のウミガメに助けてほしそうに見られていた。その熱い視線に負けて俺は三匹の豚のうち、二匹を浦島一子相伝の秘術で肉塊にして見せしめ、

こう言った。「次は貴様だ」と」
「それで、どうなったんだ？」
「するとその豚は私に殴りかかってきた。三日三晩殴り合いを続け、辛くも奴を退ける事に成功した……奴もまた強敵（とも）だった。私はその後すっかり放置していた亀に拉致られて竜宮城へと誘われた」
「浦島ー、醤油持ってないか？　出来ればわさびも欲しい」
「まだ食うのかジャック」
「悪いが持ってない」
　そして、浦島はまるで夢のような日々を過ごしたと言います。ですが、それもわずか三日で地上に戻ると言い出した浦島を竜宮城の支配者、乙姫が必死に呼び止めました。
「言葉も忘れるような美女だった。だが私には胸に決めた人がいる。彼女の誘惑を振り切り、地上に戻ると言った私に乙姫は箱を渡してきたんだ……それさえ開けなければ、この美しい港はこうも……くそっ！」
「自分を責めるな浦島。俺にだって似たようなことはある。南米密林のジャングルで政府から要請されたレスキュー活動。あの時、俺が興味本位で見つけてしまった遺跡に踏み込まなければ俺の部隊は壊滅していなかった」
「そうだぜ、浦島。俺だって東方公共降下部隊帝国第一線急襲分隊に居た頃にはよくや

らかしたもんさ。凍りつくような吹雪の中、二足歩行型戦車の破壊任務で出会ったサイボーグ忍者さえ追ってなけりゃあ……」

「アンタ達の過去を聞いていたら金太郎一家を追い出された俺の過去なんてミミズみたいなもんでした……」

狼はなんだか自分がひどくいたたまれない気分になってきます。ですが桃太郎たちがそれを気にした様子はありません。

二人の励ましに浦島も心を救われたのか、ほっとした表情を見せます。

「ありがとう。桃太郎、ジャック」

「なぁに気にするな浦島。親友だろ？」

「そうだとも。同じ太郎一族のよしみじゃないか。それにご先祖様も言ってただろう？一族は兄弟。一族は家族。一人は一族の為に。一族は一人の為に。だからこそ戦える。――って」

「そんなことは言ってない」

「あれ、これはおじいさんから聞いた言葉だっけかな……」

「つまり、だ。浦島、この港町を元通りにするにはその乙姫（おつ）ってのを倒せばいいんだな？」

「乙姫（おとひめ）だ」

「へっ、冗談だよ……。時に桃太郎。俺の家のすぐそばに生えていた、でかい豆の木を覚えているか？」
「ああ。同窓会の日に酔っ払った俺が植えたボール一杯の枝豆に、金太郎がバイオ溶液をぶっかけてそれから俺とジャックと浦島と金太郎の四人で囲み、呪文を唱えながら踊って成長を促したあれか」
　浦島がボソリと「思い出したくない……」と呟きますが、それを聞いていたのは大きな耳の狼だけでした。
「あれがどうかしたのか？」
「実はな、あの豆の木を登った先に巨人の家があるんだ。一度潜入してみたんだが、見た事もない金銀財宝に山のような武器が積み立てられていた」
「それでどうする気なんだジャック？」
「そのZ姫ってのは強敵みたいだからな。そこで装備を整えていこう」
「だから乙姫だ」
　浦島の冷静なツッコミも華麗にスルーします。ですが、竜宮城には守り神がいたことを浦島は思い出しました。
「いや、それでもあそこに行けたのはウミガメに連れられたからこそだ。もし竜宮城に行くと言うのなら大蛸の相手は免れられないぞ」

「大蛸って……まさか、さっき俺を襲った」
「そうだ、狼。だがアレが全てではない。本体は竜宮城のすぐそばから決して出てこようとしないのだ」
「それはまずいな。鬼ヶ島ならここからが一番近いってのに」
「ならどうして猟師達は漁に出ても襲われないんだ？」
「……それは……私が、玉手箱を開けてしまったからだ。開けた瞬間に噴き出た霧を吸い込み、以来、港の夜は化け物の跋扈する巣窟となった……私は辛うじて理性を保って此処を離れ、港外れの場所で暮らしているが」
　港の人達は夜の記憶が無いと言います。桃太郎もジャックも乙姫の卑劣な手段には激しい怒りを覚えました。
「おのれ乙姫、断固許すまじ！　どうやら鬼ヶ島に行く前に用事が出来たな、ジャック！」
「ああまったくだ！　Ｆ○ＣＫ！　間違えた、ＦＡＸ！　いくら女でも許せねえ！」
「いや、これは私の招いた事態だ。いくら親友といえども……」
「磯臭……じゃない、水臭いぞ浦島。言っただろう。一族は兄弟、一族は家族だって。一人じゃどうしようもないだろう、だから俺達が手を貸すって言ってるんだ」
「そうさ。まぁ、俺は太郎一族じゃないが……友人の悩みを聞けないほど器量の狭い奴

じゃないんだぜ、浦島」
「……すまない、すまない二人とも。ありがとう。だが、トドメは私に任せてくれないか。せめてものけじめをつけさせてくれ」
「勿論だとも」
「それじゃあ、これから豆の木を登って巨人のハウスに行くんですね」
「だが夜も遅い。それに長旅と連戦で疲れているだろう。今日は私の家で休み、疲れを癒してから行こうじゃないか」
　領き、桃太郎達は浦島の家で一晩を明かします。

「乙姫様、港町デ次々ト同胞タチガ、ヤラレマシタ」
「聞いておる。浦島の仕業じゃろう」
「ソ、ソレガ……太郎一族ノ者ト思ワレマス」
「なんと、それは真か!?」
「ハイ……如何シマスカ」
「おのれ、浦島め！　あの日、妾の下を去ってなければこうも苦しむ事はなかったというに！」
「乙姫様……」

「ええい、分かっておるわ。近いうちにここに攻めてくるじゃろうな。愚かな太郎一族め！　守りを固めるのじゃ！　奴等の生き血をるるいあ様への捧げ物にしてくれるわ！」

「いあ！　仰セノママニ！」

――竜宮城では乙姫の高笑いが響いていました。

竜宮城編：奴を討て！　その名は乙姫！
目指せ雲の上！

　桃太郎達は再びジャックの家へと向かって走り出しました。大草原を吹き抜ける青い風が心地よく肌を撫でるではありませんか。爽やかに汗を流す姿は青春の一ページとしても相応しいでしょう。
「ウオオオオオオ、桃太郎おおおおお！」
「なあああんだあああジャアアアック!!」
「起床、食事、食後の運動が全力疾走フルマラソンというのはどうかと思うぜ俺！」
「大丈夫だ、狼なんて嬉しそうに走ってる！」
「半狂乱って言うんじゃないのかあれは！」
　一足先に大草原を掛け抜ける姿がありました。他でもありません、狼と浦島です。
「ポギョオオバッギョルベッボオオ！」
「狼、大丈夫か狼！　くそ、駄目だ！」
　事の起こりは朝食でした。
「ＨＥＹ、桃太郎」

「ＹＥＡＲ、なんだジャック」
「玉ねぎ食いたい」
「よし分かった。任せろ」
　そして桃太郎手製の料理を食べた狼が突如として暴走、大草原へ向かって駆けだしたのです。一体どうしたことでしょうか。
「くそ、さすが四足歩行の獣！　逃げ脚だけは早いな！」
「それに追いつく浦島の動きは人間じゃ捉えきれないんだが！　流石太郎一族の中でも武術に秀でた浦島だ！」
「浦島ぁ！　この際仕方ない、半殺しまでなら許可する！」
「腕か脚の一本までならオーケーだ！」
　浦島がさりげなく「血も涙もないな！」と声を張り上げますが、二人は答える暇もありません。
　そして浦島が狼を当て身で気絶させたのはジャックの家に到着してからでした。息を切らした三人は玉のような汗を拭います。狼は白目をむいて痙攣していますが、浦島が秘孔を突く事により一命を取り留めました。
　一時間後、そこには元気に走り回る狼の姿が！
「ＨＡＨＡ、見ろよ桃太郎。狼の奴、泣くほど喜んでるぜ」

「よくやった浦島」
「腑に落ちない気分だがもういいか……」
「はっ、俺は今まで何を……!?」
　正気に戻った狼は、自分がジャックの家の屋根に張り付いていた状況に混乱しましたが何を今さらという心地で降り立ちました。
「すいませんでした」
「まったく、ツナマヨを食った程度であれほど取り乱すとは思いもしなかったぞ。ほら、まだ残りがあるからちゃんと食え」
「結構です！　いりません！」
「桃太郎、ジャック。お前らさてはわざとか……？」
「へ、なにが？」
　疑問符をあげる二人に浦島はほとほと呆れます。しかし長い付き合い、慣れたもので軽くあしらいました。
「これがあの日植えた豆の木か……信じられないが、登るしかないだろう」
「ほら見ろ浦島。ここにあの日俺達が彫った紋様があるぞ」
「酔った勢いとはいえ、よくここまで精巧な物が作れたものだ」
「うっ、頭が……」

彫られた紋様を見ていた狼が頭を押さえて座り込みました。
「大丈夫か狼？　これは太郎一族伝統の紋様でな。彫った時の人間以外が長時間見つめると頭痛、吐き気、発熱、酷い時は寝込んでしまうんだ」
「何の呪いですかそれ!?」
「それは一族秘伝の技につき明かせない。立ち止まっていても仕方ない、登るとしようか」
「浦島の言う通りだ。以前登った時にロープを繋いでおいたからそれを辿って登ればすぐに到着するぜ！」
「ヒュー！　流石だジャック！」
用意周到なジャックに賞賛の声を浴びせ、早速ロープを掴みますがボロボロになっているではありませんか。これでは登れません。
「おいジャック……」
「Ｄａｍｎ　ｉｔ！　やっちまった……この辺りの風雨は酷く酸性なんだ。それで劣化しちまったんだろう」
「結局は地道に登るしかないんですか」
桃太郎を先頭に、しんがりはジャックが務めて豆の木を登っていきました。
「おーい、ジャック。一つ聞いてもいいか」

「なんだ、桃太郎」
「以前登った時はどれくらい時間が掛かったんだ？　相当長そうだが」
「二日くらいか。だけど安心しな、しっかり雲の上の市役所に交通の便が不便ですと申請しといたぜ！」
「ほんと用意周到だなお前……」
　雲が近づいてきましたが、ふと四人の前に看板が建てられているではありませんか。上を向いている場合ではなかったようです。
　そこには黄色と黒の帯で『この先工事中につき立ち入り禁止』とありました。
「まいったな」
　何気なく左手を見ると、豆の木に上下のボタンがあります。男なら押してみたくなる衝動に駆られるのは必然、桃太郎は迷わずにボタンを押しました。
　――……イイーーーン、ポーン。
「なんとハイテクな、エレベータってやつかこれが！」
「食われたりしないでしょうね」
「お前が言うな人食い狼」
　ともあれ四人は乗り込み、桃太郎が最上階までのボタンを押します。
「あれ、扉が閉じないぞ？」

「開閉もボタンのようだな。これか？」
浦島が閉じるボタンを押しました。
ガシャーン！　勢いよくエレベータのドアが閉じ、何事もなかったかのように動き始めます。
「おい狼。ビックリしたのは分かったから壁で爪を研ぐな」
「わうわう」
「ええいガリガリとうっさいな！」
「猟銃を取り出すなジャック!?」
それから到着した雲の上。エレベータから出てくるなり四人は息を切らして倒れますが、すぐに立ち上がりました。
見渡す限りの快晴、頭上には雲一つありません。足場はふかふかの羊毛のような白い綿雲に桃太郎が感動していました。
「これを使って布団作りたいな」
「そんなこと言ってる場合か、ほら行くぞ」
「あーれー」
ジャックと浦島に引きずられて桃太郎は目的地である巨人の家を目指します。

「でけーなー」
「これ、家って言うか……館？」
「屋敷って表現すればよかったな。すまんかった」
　そして、そこから半刻ほど歩いた場所に目的の家はありました。その豪勢さには呆然と見上げるばかりです。大きさに比べて桃太郎たちはネズミ同然でした。
　それもそのはず、門も何もかもが巨人サイズなのですから。
「しかしジャック。ここで金銀財宝、武器を整えようにも巨人サイズじゃあ使えないだろう」
「ふふん、その点も俺はぬかりなかった。またいつか潜入した時の為にと武器庫を隅々までチェック、何処に何があるのかをメモしておいた」
「おお、流石ジャック！」
「……で、そのメモは？」
　……。
「家に置いてきてしまった……」
「はげろ」
「もげろ」
「死んで詫びろジャック」

「お前らの言葉が辛辣すぎて俺のハートが砕けそうだ……。ようは現地支給、いつも通りだ桃太郎！」
「それもそうか」
「それと狼は後で毛皮剥ぐ」
「なぜに!?」
「しかし昼間から堂々と潜入というのもな……」
　四人は日没を待ちました。本来ならここに到着する頃には日が暮れてすぐにでも潜入任務が開始出来るはずでしたが、文明の機器エレベータによって作戦が破綻してしまいます。しかしそんなことは些細なこと。すぐに立て直した四人はしばらくの間巨人の館を監視します。
「赤レンガに……豪華な門の下はくぐり抜けられそうだな」
「壁にこっそり穴を開けておいた。そこからすぐにでも中に入れるぞ」
「何故武器庫と倉庫から開けなかった……」
「通気性の問題さ。財宝が錆びても困る、武器庫は湿気たら大変だろ。そういうことだ桃太郎」
「そこは抜け目ないんだなジャック。ところで浦島、お前はどんな武器を入手するんだ」
「ふむ……そうだな。これといって必要なのはないが、見てみないと何とも言えん」

桃太郎は刀剣、ジャックは銃器。あとは持てるだけ金銀財宝を奪っ――おや、巨人の館から誰か出てきました。

巨人の屋敷で大暴れ

見上げるほどに大きな巨人が髭を撫でながら大きなクワを持ち、屋敷の裏口へと去っていきます。歩くだけで地面が揺れて桃太郎達の身体が跳ねました。
「桃太郎」
「なんだ浦島」
「万が一、アレと戦うことになったらどうする」
「……台所の黒い悪魔を召喚しよう」
「考えろ。なにもかもがウルトラなサイズだぞ」
「なぁに、話し合えば分かってくれるさ」
「通じる訳が無いだろう」
浦島の言葉は尤もでしたが、それにジャックが何かに気が付いたようです。
「俺は気付いた！」
「どうしたジャック！」
「巨人の女がいたら下から――」
ジャックはボコボコにされました。

「よし、日没だ。行動を開始しよう浦島」
「そうだな。狼、準備はいいか」
「いつでも」
「ならばよし。ところでジャック、お前はいつまでそこで埋まっているつもりだ？」
「埋めたのは紛れもなくお前らだろう……どっこらきぇあああああ！　ふぅ」
生首状態だったジャックが蛇のように身体をくねらせて這い出てきます。
四人は壁の小さな穴から屋敷へと潜入を始めます。何も言わずに静かに走り続け、曲がり角で先頭のジャックが手を上げました。それは停止の合図です。
「どうした？」
「……トイレに行きたい」
「もらせ」
「もげろ」
狼は学びました。下手に口を挟めば自分はまたやられてしまうのだと。なので何も言いませんでした。
「ここが巨人の武器庫だ」
「でかいな。どうやって入るつもりだ？」
「俺に任せろ！　良い考えがある」

コンコン、と扉の横。色の違う場所を叩くと、中から猫が顔を出しました。その口には葉巻がくわえられています。
「ニャンだね、ちみぃ？」
「俺だ、あの時お世話になったジャックです」
「おお、誰かと思えば貴様か。不用心にサンバを踊りながら廊下を闊歩してご主人の脚に踏みつぶされそうになりながらも半日アニメソングを熱唱していた勇者ジャックか」
他の三人からの視線が突き刺さります。
「それだけでなく武器庫にたんまりと武器を運び込んで密輸しようと企み、我々ニャングマフィアに多額の借金を背負って先週無事に全額支払い終わったばかりのジャック。ニャにか用かね？」
浦島が拳を鳴らしました。桃太郎は木刀の鞘を抜き、得物に舌を這わせます。狼は爪を広げていました。ジャックは自らの死をこれほどまでに悟ったことはありません。
「ニャ、ニャングマフィアの協力で俺達をこの武器庫に入らせてください……！」
「にゃぁにぃ？　聞こえんニャ～？」
「マタタビ」
「よし、入れ」
「それと倉庫にも入りたいのですが」

「よろしい。部下達に言っておくニャ」

最終手段・賄賂の前にはニャングマフィアの窓口もあっさりと引き下がりました。

カビ臭い武器庫の中に入ると、ニャング達の鋭い眼光に睨まれます。

「みんニャ、よく聞いてくれ。我々の決起の時は来た！　今こそ巨人の屋敷で飼い慣らされていた我々ニャングマフィアが反旗を翻すのニャ！　まずはキッチン！　次に家具！　順次目につく金目の物を破壊して一家を破産させるのニャ！」

ニャーニャーと大勢の猫達が歓声をあげます。

「忘れたわけではあるみゃい！　ストリートワングマフィアが受けてきた数々の仕打ち！　我々の半身とも言える戦友、中堅ポチ公の率いた隔離連隊狂犬病部隊ＭＤ０１が壊滅したあの日！　忘れもしない、次々と保健所に連行されていくストリートワング達のあの遠吠えを……あの決死の特攻が無ければ我々ニャングマフィアはこうして生きていない。苦汁の毎日、屈辱の日々、青汁飲んで健康ライフ。今なら一月３０パックでなんと驚きの二万円！

通販生活で細々と食い繋いできた我々の復讐を見せつけるのニャ！　ジィイイイーク・ハァァァァイル・ニャンダフル！」

ニャアアアアアア！　――他の猫達が一斉に武器庫から去り、ただただ桃太郎達は呆然としていました。

「ジャック……畜生相手に借金とか……」
「い、いや。あの時は仕方なかったんだ！　大量の武器を運ぶのに」
「で、その武器の出所は？　東方公共降下部隊帝国からか？」
「……脱退する時にな。今じゃ地図にも載ってねぇさ」
「というかマタタビだけでこんな騒ぎ起きていいのか」
「いんじゃね？　どうせ俺達の目的はこれだし」
　積み上げられる木箱の山。それを開けると乱雑に詰められた銃器・鈍器・刀剣・凶器・書物・エロ本……現実逃避……再度確認……エロ本・薄い本が大量に詰め込まれていました。
「ジャックぅ……ジャアックゥ！　ジャアアアアアック！　何故だ！　お前は何故こんな素晴らしい物を持っていると教えてくれなかった！　何処だ、どこで買った！　何処でこんな素晴らしくエロい書物の山々を購入してきた！」
「俺は……てっきりお前が引くかと思って教えなかったんだ」
「アホを言うなジャック！　俺を見くびるな！　桃から生まれたと言うだけで幼少よりケツ好きの変態と言われ続け、それでも俺は女性の価値はオッパイであると主張して職員会議で晒し者にされた挙げ句、呼び出されたおじいさんがマイクが壊れるほどの大声で「女性の価値はぁぁぁぁ、プリップリのケツだぁぁぁ！」と叫び、おばあさんと血み

どろの三日三晩死闘を繰り広げていた思い出を持つ俺が――！　ってなぜドン引いてる狼」

「俺が今まで食べてきた人間もそうだったのかと思うと恐ろしくなってきた」

身震いする狼の肩に、浦島が手を乗せます。

「気にするな、狼。人類の男性という種族は総じて変態であり、同時に紳士なのだ。常日頃から女性と如何に接触すべきか、どうしたら喜ぶのか、愛とはなにか。揺れ動く乙女の恋心にどうしたら気付くのか。夜の営みに置いての作法とは何か。何故人類は男と女の二つしかないのか、人間とは、感情とは、真理とは、宇宙に広がる無尽蔵のエネルギーを我々人類が誤った方向に使ってしまわないか。いつの日か自らが生きる星の命を絶やしてしまわないか――男とは、人類とは、人間とはこういう生き物だ。だから気にするな人食い狼。総じて男性は変態だ」

「で、浦島。お前はどこフェチだ」

「後ろから見た時の腰のライン、背中の中央を真っ直ぐ走る背筋だが？」

「お前も大概だな……まー、かくいう俺はやっぱ女性はハートだけどな」

「ジャック、お前が誇らしげにドヤ顔なところ悪いが。なんで大概ハードなのばかりなんだ？　しかもか弱い女性が快楽の虜に」

「ヤメロ、ヤメロォオオオオオオオオ!!　俺の性癖を暴露するな！　口頭で説明するな

桃太郎ぉ！」
「おー激しい」
　ペラペラと読み耽る桃太郎と、様子を見ようと一冊を手にした浦島。そして偶々発見したケモナー大歓喜の薄い本を手にした狼が次々とジャックを公開処刑していきました。
「ひぎぃ、らめぇ、そんなの無理ぃ。駄目ぇ、私、わたし壊れちゃうー」
「やめろぉぉぉぉ俺を羞恥心で殺す気かぁぁぁ！」
「俺はベッドに倒れた彼女の腰を持ち上げて」
「便乗するな浦島ぁぁぁぁぁ!!!」
「おーはげしい」
「ただし狼、テメーは駄目だ！」
「ギャウン!?」
　その後も一悶着、押し問答、二悶着ありましたが、なんとか話を脱線させることに成功したジャックが耳まで真っ赤にして武器庫を後にします。桃太郎達は武器を調達して武器庫を後にしました。次は倉庫で金銀財宝です。
「なぁジャック。自分が選んだ薄い本を友人に音読されるってのはどんな気分だ？」
「賢者タイムに差し掛かって平静心を取り戻し、冷静に後始末をしようとしたその時。

意中の女性が友達を沢山連れて部屋にやってきた気分だ」
「……すまない、すまないジャック！　そんな事も分からず俺達はなんてムゴイ事をしたんだ！　死んでも詫びきれない！」
「いいんだ……いいんだ桃太郎。お前に隠し事をしていた俺も悪かったんだ……」
ジャックの眼が死んでいました。光が失われて乾いた笑いを浮かべながら倉庫に向かって歩きます。その背中から漂う哀愁がまるで秋風を彷彿とさせました。
屋敷の中はニャングマフィア達の起こす騒動によって火がついたように慌ただしくなっています。その混乱に乗じて桃太郎達は倉庫に忍び込みました。
「ミャ！　ボスから話は聞いてます、早く中で用事を済ませるミャ！　脱出の手筈も整ってますミャン」
「ありがとう！」
「ヒャッハァァァ！　金だ金だ！　金の風呂ダァァ！」
「欲望が爆発してる桃太郎はどうする？」
「殴っとけ浦島」

お宝奪って大脱走！

「桃太郎」
「はい……」
「落ち着いたか？」
「ああ。だから頼む、指を離してくれ」
「俺がこの指を抜いてから……そうだな、一分だ」
「どうなるんだ……」
「一分以内にボケると非常に強烈な便意を催す」
「なん……。俺は三分に一回ボケないと死んでしまう仮病なんだ！」
「本当か桃太郎!?」
「マジなんだ！」
「嘘だろ」
「ああ、嘘だ――ぐぉおおおおお!!　尻がぁあああああああ!!!」
「言ってから十秒も経過してないぞ」
桃太郎は両手で腹を押さえながら走り去りました。その後ろ姿を見て、ふとジャック

が思います。
「なぁ浦島。桃太郎はどこのトイレに駆け込んだんだろうな？」
「知らん。さぁ今のうちに金銀財宝を持って逃げよう」
「そうするかー。おい狼、そっち持ってくれ」
「重っ！」
「当たり前だ。中には昔襲った海賊船から略奪……ゲフンゲフン！　海原で拾った金貨だらけだからな」
「アンタ、今……」
「さぁー運ぶかー！」
狼から猜疑の眼差しを向けられますがジャックは一向に目を合わせようとしません。
そこに桃太郎が戻ってきました。
「浦島ぁ！　さっきはよくもやってくれたな！　ヒャッハー金銀財宝ダァー！」
「オラァ！　どりゃあ！　そいやぁ！　桃太郎、お前は学習能力がないのか」
「げふぅ！　ぐほぁ！　すいませんでした！　何も三回も殴る事はないだろう浦島！　一発蹴らせろ！」
「すまんかっ――ぐぉぁぁぁぁぁぁ!!」
「太郎一族秘伝技・爆裂四散エメラルドボンバー！」

「桃太郎、今十四発蹴っただろ!?」
「いや、爆裂四散ダイナマイトランチャーシュートは十四発で一回の蹴りだ」
「そうだったな、ならこれでチャラにしよう」
桃太郎の一撃で重傷を負った浦島は口元から垂れる血を拭い、フラフラと立ち上がります。
「大丈夫ですかね浦島さん。というか何してんですかあの二人」
「俺は太郎一族じゃないからよく分からないが、なに。直に慣れる」
「慣れたくないと思ってしまった俺はどうすれば……」
「その時は桃太郎の非常食だ」
えっほえっほ、ジャックと狼は掛け声を合わせて巨人の館を後にしました。館の外から中の騒動をしばらく眺めてましたが、猫の鳴き声が騒がしいままです。まだニャングマフィア達が暴れているようでした。
「遅いな、アイツら」
そうジャックが呟いた矢先に巨人の館が爆発していくではありませんか。次々に崩れていく館から巨人が逃げ出してきました。ニャングマフィア達も一斉に逃げ出してきます。
「おい、どうしたんだ一体!?」

「ふみゃあ!?　ウチらじゃないニャ！　二人が喧嘩を始めたんニャ！」
「なにぃ!?　狼、財宝持って下まで降りるぞ！」
　ジャックの慌てように狼は急かされ、エレベーターに乗り込みますが重量オーバーのブザーが鳴りました。
「くそ、走って降りるぞ！　ぐずぐずするな、急げ馬鹿！」
「なんでそんなに焦ってるんだジャック！」
「うるさいアホ！　なんで俺だけタメ口なんだお前！　間抜け！　ハゲ！　走れ！」
「せめて理由だけでも」
「骨やるから黙って走れ！」
「応ッ!!!」

　ジャックと狼が豆の木のエレベーターに乗った地点まで到着して一息入れていたその時、扉が勢いよく開くと中からボロボロの桃太郎と浦島が出てきました。息も絶え絶えな様子で倒れ込みます。
「お前らまた喧嘩したのか」
「ああ、こじれた言葉のデッドボールでな」
「お前の表現方法がねじくれてる」

「上で何してきたんですか桃太郎さん」
　四人で財宝の詰まった箱を持って降っていきました。しかし桃太郎と浦島は疲弊しているので手をかざしているだけです。
「ああ、浦島とちょっと殴り合いをしたんだ。納得がいかないと言い張ってな。一発は一発、三発を一発で譲歩したというのに」
「あのあとお前は二発殴っただろう！」
「一発だよ！　疾風怒濤サンシャインブレイクは一発にカウントだろう！」
「ことごとくネーミングがダサい！」
「仕方ないだろう。太郎一族は技を洗練していく内に名前も改良されていったんだから」
「じゃあ初めはどんな名前だったんですかそれ」
「真空正拳突きだが？」
「どうしてそうなった!?」
　四人がジャックの家で一段落していると、雷鳴のような声が降ってきました。何事かと外を見れば巨人の一人が豆の木から降りてくるではありませんか。その顔には見覚えがあります、他でも有りません。廊下の真ん中でサンバを踊りながら半日アニメソングを熱唱していたジャックを踏み潰そうとしていた館の巨人でした。

「チィッ！　野郎、もう財宝が盗まれた事に気付きやがった！」
「というよりは家を壊されて怒ってるようにも見えるが」
　壊した張本人である浦島の言葉に誰も何も言いません。黙って武器を用意すると外へと出ました。
「おいジャック。何担いでるんだ？」
「Ｍ７２ロケットランチャーだ！　オラオラァ食らいやがれぇ！　おい桃太郎、そこの箱こっちに引きずってくれ。そうそうそれだ、サンキュー」
　箱の蓋を開けると大量に詰め込まれた使い捨てのロケットランチャーが入っていました。ジャックはそれを使いきる勢いで撃ち続けます。すると巨人が掴んでいたつるが千切れ、大草原に落ちました。地面が揺れて四人は尻餅を着きます。
「いててて……ケツが」
　黒煙に包まれた巨人がうめき声をあげながら起き上がろうとしていました。
「あれだけ食らってまだ立ち上がるか！」
「ウガァァァァァ！　この小人めが！　よくもやってくれたな！」
　巨人の声は海まで届きそうなほどの大声でした。
「クッソウ、案外タフな野郎だ。だったらこれでどうだ！　食らえ、Ｍｋ１９オートマティック・グレネード・ランチャー！」

家の壁から飛び出ていた突起物を引っ張ると、中に隠されていたグレネードランチャーが現れます。ジャックはすかさず狙いを定めると巨人に向けて撃ち続けました。
「ぐわあああ、おのれ、グワー！」
他の三人はその光景を眺めています。
「……あれ、案外巨人って弱くね？」
「確かに。あれなら秘孔も突けそうだ」
やれる！　――そう確信した三人は巨人に向かって走り出します。しかし軽く手で払われただけで三人は木の葉のように吹き飛びました。
「ちくしょうつええ！　どういうことだジャック！」
「冷静に考えてお前ら本当は馬鹿だろ！　近づいたらやられるに決まってるだろうが！だからこうしてグレネードランチャー撃ってるんだ！」
「それもそっかー、それよりジャック。救急箱どこだ……」
「メディーック!?」
ジャックが叫びますが、砲座を離れる訳にもいきません。そんな時に頼りになるのが浦島の秘孔術です。
「桃太郎、死ぬほど痛いかもしれない危険性が伴うが我慢しろ！　浦島秘孔術秘伝、起死回生！」

「うぼぁ……」
　浦島の指先で突かれた桃太郎がガックリとうなだれ、糸の切れた人形のように身動き一つしなくなりました。
「だ、大丈夫ですかこれ!?」
「心配するな。一時的な仮死状態に陥ってるだけだ。目を覚ましたその時」
「そ、その時……？　桃太郎さんはどうなるんですか」
「黄金に輝きながら天に召される」
「死んでるぅーーーー!?」
「というのは冗談だ。肩こり、腰痛、ムチウチ、ガン、不治の病、厨二病までなにから何まで治った健康体で復活するぞ」
「じゃあそれまであの巨人を」
「ああ。ジャック！　頑張って時間を稼いでくれ！」
「なんだってー!?　聞こえなーい！」
　ボカーンボカーン――爆発音で浦島の言葉が遮られていました。
「時間を稼げぇ！」
「はぁ？　ご飯食いたい!?」
「だーかーらー、時間を、稼げー！」

「ああ、はい。漬け物ないってなー！」

ドーンボカーンズドーン！　――巨人は砲弾の雨にたじろいでいます。そして二人の会話もすれ違っていました。

竜宮城を目指して激戦へ

グレネードランチャーを撃てども撃てども巨人は一向に倒れません。さすがにジャックも苛立って舌打ちをしました。

「やい巨人！　爆撃を一旦止めてやるから話し合おうじゃないか！」

「散々攻撃しておいてよく言う！　話し合いに応じるとでも思ったか小僧！」

「実は招待状を貰った！　かの竜宮城に住むと言われる絶世の美女からだ！　それでもか！」

「なに！」

「それでもか！　俺達はお前の実力を測る為の尖兵にすぎない！　お前のタフネスは見上げたものだ！　パワーも申し分ない！　太郎一族の一人、桃太郎ですら一撃であのざまだ！」

仮死状態に陥ってグッタリしている桃太郎と、それを抱える浦島がそこにいます。狼はどうしたらいいものやらうろたえていました。

「だからお前には竜宮城へ行ける権利をやろう！　もちろん我々の独断だ！　悪くない話だとは思わないか！　俺たちへの苛立ちを腹に収めれば、乙姫と酒池肉林が待ってる

ぞ！」

　巨人は考えました。撮るに足らない小人が四匹。家を失ってしまいましたが、それでも乙姫に一目会ってみたいという下心が捨てきれません。ジャックの言葉巧みな話術に巨人の心が揺れました。

「俺達に指一本触れてみろ！　お前のごんぶとな指で俺の懐から乙姫からの招待状が無事に取り出せる自信があるならな！」

「グ、グググ……！　よ、よし分かった！　その招待状とやらを早く渡せ！　そうしたら今すぐにでもこの場を去ってやろう！」

「よし、なら少し待っていろ」

　ジャックが胸ポケットから取り出したのは一枚の封筒。それを見せつけ、差し出された巨人の掌に乗せました。

「竜宮城へはこの道をまっすぐ、その港から海に潜った先にある！　楽しんで来い！」

「おう！　ガッハッハッハ！」

　巨人は大笑いしながら焦げ付いた服のまま去っていきます。ジャックは冷や汗を拭いました。それもそのはず、オートマティック・グレネード・ランチャーの残弾数が底を尽きそうになっています。

「ふう、どうなることかと思ったがチョロかったな」

「ジャック、お前を軽蔑する」
「この腐れ外道」
「なんだとお前ら！　人が巨人をどうにか追い払ったのに！」
「大体なぜお前が竜宮城からの招待状を持っている！」
「あれは嘘だ」
　堂々と言い放つジャックの顔に浦島の鉄拳が突き刺さりました。
「お前、なんて奴だ！　その場を切り抜ける為とはいえ嘘を吐くとは！　見損なったぞ！　今まで馬の骨のような奴だと思っていたがこれからは馬糞のような奴だと誉め称えてやる！」
「なんだと浦島！　確かに俺は太郎一族じゃない、金太郎も罠に掛けてその大金を奪おうとしたこともある！　だがお前には特にこれといって何もしてこなかったのにどうしてだ！」
「そんなことまでしてたのか!?」
「オハヨー」
「「桃太郎！」」
　仮死状態に陥っていた桃太郎が起き上がります。言い争う二人もそれに驚いていました。浦島の予想ではあと一時間は目覚めないはずでしたが、秘孔を突くのが浅かった

のでしょうか？

「桃太郎、大丈夫か」

「なんだか今はとても身体が軽い。こんな気持ちなのは始めてだ。まずは風呂だな、うん。一張羅が台無しだ」

「ならすぐにでも沸かそう。おい狼、手を貸してくれ」

「しょうがないにゃあ」

「おい狼。狼！」

「ワフン！　きゃうんきゃうん！」

狼がジャックに追い掛け回されながら風呂を沸かしにいきました。

「桃太郎、ジャックのことなんだが」

「なぁに、汚れ役なのは知っている。だがアイツが頼りになるのも間違いない。少なくとも俺達太郎一族よりも頭は回る。舌も回る。小手先の器用な男だ」

「だがアイツは金太郎を！」

「罠にかけたというなら、実は俺もだ」

「なにい!?」

「金太郎は俺の楽しみに取って置いたシュークリームを一人で食べたからな。その腹いせに罠に掛けてやったんだ、ジャックと一緒に」

「なら仕方ないな……」
　掟に従った罰なら浦島からは何も言う事はありません。
「しかし、桃太郎。秘孔を突いてから一時間も経過していないのに快復したのか」
「うん？　絶好調だぞ。それがどうかしたのか浦島」
「……いや。さすが太郎一族の名前を継ぐだけはあるなと思っただけだ」
「はっはっは、俺は桃から生まれた桃太郎だからな。太郎一族当主、初代桃太郎様と同じ出生だ」
「かつて同じように日本一を目指した御方。今となっては隠居生活で嘆かわしい……俺とて浦島の一人だ。なんとしても竜宮城を攻略して見せるとも。俺の代でこの長い戦いも終わらせてみせる」
「俺も全力を尽くそう、浦島」
「風呂が沸いたぞー」
「おお、ありがとうジャック。狼はどうした？」
「にんにくとたまねぎのダブルコンボで発狂中だ」
「何をしているんだお前は!?」
　翌朝、白目をむいて痙攣している狼が屋根の上で逆立ちしてるのを発見した浦島が桃太郎と同じ秘孔を突いてやりました。仮死状態の狼を背負い、一行は再び港へ向けて歩

き出します。

港に到着すると、そこはかつて美しい港町の景観を失っていました。霧が立ち込め、黒く大きな影と巨人が死闘を繰り広げています。その足元には半漁人たちが群れて闊歩していました。これは一体どういうことでしょうか。

「くそ、俺達が別な街に立ち寄って換金してる間に一体何があったんだ！」

「ギャンブルでボロ儲けしたから遊んでたのがいけなかったのか？」

「やはりさっさと来るべきだったな。あれは乙姫の親衛隊だ」

浦島に言われて目を凝らしてみれば、確かに装備が整っているようでした。ですが巨人の家から死ぬまで拝借した新装備の前ではゴミクズ同然。四人の進行を阻めるはずもありませんでした。

そんな桃太郎達に気付いたのか、巨人が触手で首を絞められながら睨んできます。

「き、貴様ら……話が、違うではないかぁぁ……！」

「ふっ、竜宮城からの尖兵というのは仮の姿。そいつは門番、いわばゲートキーパー！」

「意味同じだろう」

「つまりそいつを倒さなければ竜宮城へと入る事は出来ないのさ！」

「よくもまぁそんな口から出まかせがスラスラと出てくるなジャック」

「さぁ巨人よ、俺達の手を借りれば難なく行けると思うがどうする！」

外道ここに極まれり、巨人は遠のく意識の中で自分のプライドと乙姫に会いたい下心とを天秤にかけます。まだ見ぬ美女を目の前にここで挫折するのか、否。男にはやらねばならぬ時があります。

「た、頼む！　俺に手を貸してくれぇ！　こんな所で倒れる訳にはいかんあのだぁ……！」

「だそうだ。どうする桃太郎」

「とりあえず半漁人を片づけよう。デカイのは任せたぞジャック、浦島。狼と俺は雑魚を掃除する」

「心得た。往くぞ馬糞野郎」

「オーケー。派手にやろうか浦島！　あとで殴らせろよお前!!」

「仲良いなぁ、あの二人」

「どこからどう見ても浦島さんがジャックからの機関銃を避けながら敵を蹴散らしているように見えるんですが」

「あれは連携ぷれぇという〝ちぃむわぁく〟だ。ちぇえええええけえええ！」

「アチョー！」

桃太郎もチェーンソーを振り回して半漁人を解体（バラ）していきます。狼は新たに手に入れたヌンチャクを激しく振り回しながら敵陣に突入していきました。

目指すは竜宮城です。桃太郎達は巨人を美味く利用しながら占領された港町を奪還する為に戦い続けました。

激突、竜宮四天王！

――その桃太郎達の奮闘は深海の竜宮城で待ち構える乙姫の耳に入ることとなりました。

「お、乙姫サバぁ！」

「なんだマグロか……」

「港に太郎一行が現れました！」

「聞いておる」

「その戦いの影響で港町が消滅しました！」

「へー……えぇえぇ!?　なんぞ!?　なんでじゃ！」

「太郎一族友情合体！　必殺・サンシャイントルネードの使用によって海が大荒れです！」

「そんなダッサイネーミングの技に壊滅的打撃を受けてどうするか！　それにここをどこだと心得る、竜宮城ぞ。我が参謀、ウミガメ三四郎の協力も無しにどうやって侵入するという！　兵を募れ！　増援を送り込み奴等を近寄らせるな！」

「そ、それが……先程宅配業者が来訪されまして」
「ええい、まどろっこしい。それがどうした、ハッキリ申してみよ！」
「変装していた桃太郎達に侵入されました！」
　マグロが言い終わると同時に豪華な扉が爆発し、煙の中から桃太郎達が現れました。
「深海クキワカメ運送業者は海に忍ぶ仮の姿、その真の姿とは――そう。俺は太郎一族が一人、桃太郎！」
「青い海原真っ赤に染める。門外不出の秘孔術、浦島太郎！」
「東西奔走解体業者！　俺はジャック！　部外者です」
「ポイ捨て撲滅運動委員会会員ナンバー下二桁！　人食い狼ですが部外者です」
「なんだこの変態達!?　なんでパンツ一丁なのじゃ！　服を着ろ服を！」
「さっき脱ぎ捨てた変装用の服しかない！」
「いいから着ろ！　るるいあ裁判所に突きだされたいか！」
「馬鹿野郎、これは下着じゃねぇ！　ブーメランパンツという水着だ！」
「癖になる解放感」
「テメエは黙れ狼」
　ジャックに足蹴にされてショットガンを突きつけられる狼は顔を青くして静かになりました。

「さぁ覚悟しろ乙姫！　お前が今まで働いてきた悪逆非道の数々！　許すまじ！」
「動物虐待してる貴様がなにを言うか！」
「港町を壊滅させた太郎が何か言ってますよ」
「大義に犠牲は付き物、諦めた。解決！　さぁ行くぞ！　覚悟ォー!!」
「こ、この外道がァァァァ!!」
　なんということでしょうか、桃太郎達の前で脚の生えたマグロが変身したではありませんか。筋骨隆々の黒光りする青白い肉体。頭だけはマグロの名残が残っていました。
「我は竜宮一のスタミナを誇る黒き鋼鉄、本マグロ！　深海のスピードグラップラーと恐れられる我が海産格闘術、とくと味わえい！」
「面白い。解体ショーで三枚開きにしてやりたいが出来ると思うかアンケート！　出来ると思う奴はその場でジャンプして空中で四回転、ひねりを加えたブリッジで着地してみせろ！」
「「トォー!」」
「ト、ぐぇばぉ!?」
「ありがとう浦島、ジャック。お前達からの励まし、しかと投げ捨てた！　ところで狼、大丈夫か？」
「なんで、なんで出来たんだそこの二人……！」

狼が悔しそうに床を叩きました。

「来い、竜宮を守る四天王！　乙姫の名において命ずる。侵入者を排除せよ！」

乙姫の傍に現れた新たな敵の中には浦島が助けたウミガメもいました。

「我こそは深海の番犬。その実草食系、切り裂きシャーク！」

「拙者、乙姫の側近が一匹……流れ弾のトビウオと申す」

「ウミガメ三四郎でございます。趣味はほふく前進、特技はフルマラソン。トライアスロンを過去に三回制覇してきました。よろしく頼みます、ケケケ」

「なんでお前ら裸なんだ。狼ですらパンツ穿いてるのに」

「フハハハハ、我々海産物シリーズに肌着など邪悪！　外道！　恥晒し！　すっとこどっこい！　おとといきやがれ！　そのような物で肌を守らなければならないのは陸に生きるお前たち軟弱な生命だけだ！」

「切り裂きシャーク。お前はこの俺を怒らせたぁー！　ポイ捨て撲滅運動委員会会員ナンバー下二桁、この狼が相手してやる！」

「おうおうおう、テメエどこの魚の骨だぁ～おぉん？」

「んだとコラァ、やんのかコラァ！　お？」

睨み合う狼と切り裂きシャーク、激しい肉弾戦の桃太郎とマグロ。浦島とジャックの前に立ち塞がるのは片腕のトビウオと額に切り傷のあるウミガメ三四郎です。

「浦島。ウミガメは俺に任せろ」
「いいのか、ジャック」
「お前が過去の恩義を重んじる古風な男なのはよおく知っているからな。任せとけ」
「……すまない。任せたぞ」
「海産格闘術が壱之技！　鉄砲水！」
「なんの！　太郎流剣術、袈裟極め！」
　マグロの口から勢いよく吐き出される圧縮された水滴を、桃太郎は巧みな剣捌きで斬り払います。しかし水圧に負けて刀を取りこぼしました。
「なにッ!?」
「フゥハァー！　太郎一族、恐るるに足らず！　海産格闘術が弐之技！　水切り！」
「うぉ!?」
　マグロの握りしめた拳を通過した水滴が矢じりのように鋭く変形し、桃太郎を追い詰めます。素手の桃太郎は呼吸を整えました。
「はぁぁぁ……！　太郎流拳闘術、猫撫で」
「な、なんだと!?」
「猫を撫でるが如く受け流すべし！　ニャー！」
「ぎゃあああ、ネコ。ネコの幻覚がぁぁ！」

「隙有り！　太郎流拳闘術之極、太極八卦六道掌ッ！」
マグロの周囲に残像を残しながら桃太郎の拳が打ち込まれていきます。八方からの六連撃、瞬く間に四十八発もの拳を受けてマグロの身体が真上に吹き飛びました。
「太郎流基礎格闘、拳胴抜き！」
目にも止まらぬ一撃で追撃されたマグロの身体は玉座の間の壁に叩きつけられます。ですが、平然と立ち上がるではありませんか。これはどうしたことでしょう、桃太郎が右腕を押さえます。手の皮が裂けて血が滴っていました。
「フゥホホ、その程度ですか桃太郎」
「グッ、なんて硬さだ……！」
「確かに凄い技。しかし世界各地の海原を走り続けること早云年。私の鱗はあらゆる牙も通さない。黒き鋼鉄の名は伊達ではないのだよ！」
ポーズを決めるマグロの肉体が隆起します。伊達にその肉体が筋肉で構成されてはいません。
「ふっ、こいつは強敵だ……！　燃えてきたぁ！」
新たな強敵を前に桃太郎は不敵な笑みを浮かべました。相手にとって不足はありません。
狼と切り裂きシャークの戦いもまた激しい火花が散っていました。

「シャーヒャー！　刻んでやるぜぇ」
「ガルルル……！　やってみろ、切り裂いてやる！」
「あぁん、生言ってんじゃねェぞオラァ！　どこ中だよ！」
「中退だ、文句あっかオラー！」
「や、やるじゃねえか……!?」
　切り裂きシャークの居合技が閃きますが、そこは狼。優れた動体視力で捉えていました。ヌンチャクを振り回し、攻撃を逸らしていきます。
「ワフン、居合を無闇やたらと振り回すとはナンセンスだ」
「シャヒャヒャ、おめでたい奴め」
「ぎゃふぅ！　い、いつの間に……!?」
　狼の肩口が突然裂けて血が吹き出ました。
「面妖な技を……」
「お前のようなケダモノに見切れるか？」
「ヌ、ヌンチャクー！」
　切り裂きシャークの一閃でヌンチャクの鎖を断ちました。これではヌンチャクも使い物になりません、二本のスティックです。
「ク、クソウ！　お前のような海産物はカマボコにしても生ぬるい！　ぶっ刻んでやる

！」

狼は自前の爪を構えました。しかし切り裂きシャークは途端に攻撃を止めます。

「……どうした、来いよ」

「……シャヒャ、小賢しい！」

激しい攻防の最中で狼は爪から伝わる手応えに奇妙な違和感を覚えました。怪訝に思うのも束の間、今度は脇腹を掠めます。

「見えた！　そこ！」

「ヒャ!?」

狼が切り裂きシャークの居合を捉まえました。その刀の刀身はなんと二つに別れていたのです。

「お前の居合は一度で二度斬りつけてくる。どうりで防ぎきれないわけだ！」

「だ、だが刀を押さえた所で！」

「俺の爪を甘く見るなよ切り裂きシャーク！　ワオォォォ！」

「ば、馬鹿な！　愛刀鮫肌が！」

「物凄く痛いから使いたくはなかった……」

血涙を流しながら見せる狼の爪は赤熱していました。刀身が溶断された愛刀を見て切り裂きシャークは後ずさりします。

「な、なんだその爪は……」
「こいつはな、俺がかつて金太郎一家の下で働いていた時に教わった技だ……」
「な、何者だお前！」
「狼だ！　食らえ、爪獣ヒートクロー！」
「ぎゃ、ギャアアー！　熱い、肌が焼けるように熱いいいい！」
「のたうち回れ！　這いつくばれ！　野を駆け地を走る生命に頭を下げろ！」
「シャ、シャヒャヒャ……だ、誰が！　我が牙を舐めるな！」
手痛い反撃を食らった切り裂きシャークの身体には痛々しい爪跡が刻まれました。

深海の決着

切り裂きシャークの絶叫が響きます。しかし静かな緊張感を漂わせる流れ弾のトビウオと浦島の睨みあいには聞こえませんでした。
「へぇ、へへぇ。お久方ぶりですねぇ、浦島さん」
「退け、死ぬことになるぞ」
「へぇっへへ。そういうわけにもいきませんで、はい。しかしまぁなにゆえに乙姫様に刃を？　おっと失敬、拳でしたねぇ」
「……港町を汚染した。その玉手箱を渡した元凶である乙姫を断てば美しい我が故郷が戻ると」
「火のないところに煙はねぇ、とですか。しかしですね、浦島さん。残念ながらそいつぁなりませんでぇ？」
「なに!?」
「それで救えるのは後世。確かに乙姫様を倒せば玉手箱の効果は消えやす、へい。ですがねぇ、その効力が即効とは限りませんぜ」
「……くっ」

「如何しやすかい？」
「それでも俺は此処まで来た。やらせてもらうぞ」
「へ、へぇっへへへ！　出来やすかねぇ、竜宮一のすばしっこさとウザさと狡猾さと紳士さを持ち合わせたこの流れ弾のトビウオに」
「先手必勝！」
「うぼぇあっぱぁら!?　ひ、卑怯ですぜ!?　不意打ちだなんでぇっぷらぁ！」
「不意打ち！　闇討ち！　奇襲隠密暗殺拷問束縛拉致監禁！　貴様には、八大猫地獄すら生ぬるい！」
「な、南無八幡大菩薩猫の加護を得ていると！　浦島、貴方は一体……!?」
「俺がこの指を抜いてから三年後。お前は綺麗な嫁を貰い、幸福な家庭を築いて幸せを噛みしめながら息絶えることだろう」
「な、なんですって……」
「だが此処で死ぬ。経絡秘孔の一つを突いた」
「どこの!?」
「ここを突くことにより本来ならば肩こり・腰痛・リウマチ・ヘルニア・頭痛・吐き気・心臓に毛が生える程度の病気ならば瞬時に完治する。だが此処で死ぬ」
「い、いやだ！　やめてくれ！」

「だが此処で死ぬ」
浦島が流れ弾のトビウオの身体から指を抜いた瞬間の出来事でした。
「ごふぉあ！」
「ぐはぁ！」
「しらたき食いたいっ！」
本マグロ、ウミガメ三四郎、切り裂きシャークが苦悶の声を挙げます。唖然とした流れ弾のトビウオが後ずさりました。
「し、死にたくな……乙姫サバァ！」
「しまった間違えた」
浦島の淡々とした呟きが終わると同時に流れ弾のトビウオの身体が膨れ上がります。そしてそのまま倒れ込むとピクリとも動きませんでした。なにか納得がいかないように唸ります。
「……死んでしまった……私が秘孔の説明を間違えたばかりに」
「でも結局倒してるじゃねーか！」
「おお、桃太郎。大丈夫か、こんなところまで吹き飛ばされて。全身青あざだらけだが」
「当然だ。ブーメランパンツ一丁でマグロと殴り合ってるんだからな」
「今なら秘孔を突いて強化してやることも出来るがどうする？」

「でも高いんだろう？」
「それをなんと今回はアイツの命だけで十割キャッシュバック」
「まぁお得！」
「ただし制限時間は十秒だ」
「ならやめとく。とおりゃあああ！」
桃太郎は再三、本マグロに立ち向かいます。しかし何度打撃を加えても一向にダメージが通りません。その様子を見ていた浦島が不敵に笑いました。
「なるほど。そういうことか桃太郎。相変わらず抜け目のない男だ」
浦島は壇上へと駆けあがりますが、いつの間にか乙姫の姿が消えています。
「おのれ、逃がすか！」
玉座の後ろに見える通路に向けて浦島は走り出しました。
そしてジャックとウミガメ三四郎の戦いはこう着状態のまま動きません。
「くっ、さきほどの胸を刺すような痛みは一体……はっ。まさかこれが……変！」
「変身などさせるか！」
「お、おのれ！　何をするのですか！　変身中は攻撃してはならない暗黙のルールを知らないのですか！」
「残念だがそれは違うぜウミガメ三四郎」

「なんですと!?」
「オレタチ、正義の味方。オマエ、敵。ダカラ、駄目。分かる?」
「……何故カタコトで」
　ウミガメ三四郎の背後に回ったジャックはヘッドロックをかけようとしますが、甲羅の中に閉じこもって避けられました。
「この野郎出てこい！　オラオラオラァ！」
「ヒィ！　甲羅の中に閉じこもっても執拗に蹴りを入れてくるこの人間何なの!?」
「桃太郎、こいつを使えええええっ！」
「私は武器じゃないいいいいい！」
　ウミガメ三四郎を持ち上げ、それを投げたジャックでしたがコントロールが狂って狼の顔面に直撃します。
「俺が……お、俺が何をしたってんだ……ぐふっ……」
「お、狼いいいいいいいいい!?」
　狼を抱き起こした桃太郎が頬を軽く叩きました。ジャックも慌てて駆け寄ります。
「大丈夫か狼！　しっかりしろ狼！　こんなところで死ぬな狼！　一体誰にやられた狼！」
「ジャ……ジャックに……」

「おのれウミガメ三四郎！　俺達の大切な仲間をよくも！」
「てめえらの体など三枚下ろしになんかしてやるものか！　捌いて叩いて醤油とワサビで美味しく丼にしてやる！」
「ジャックが……」
「もういい喋るな狼。お前は其処で休んでいろ！　あとで保健所に連れて行ってやるから！」
「寝てる場合じゃねえなそれ!?」
「あ、起きた」
　狼がなんとか一命を取り留めました。血痰を吐き捨て、口元の血を拭います。
「くそ、なんて強敵だ……」
「ある意味アンタらの方が強敵だよ……」
　これには流石の本マグロも苦笑いで返しました。
「くそ、流石は黒き鋼鉄のマグロだ。洒落にならない硬さだ……」
「ウミガメの野郎も中々にしぶといぜ」
「切り裂きシャークめ、奴の牙もまた鋭い……」
　ふと、三人が顔を見合わせます。
「本マグロ！　作戦タイムだ！　少し時間をくれないか！」

「よろしい！」
「ありがとう！」
ヒソヒソと三人が作戦を立てていると給仕係のタツノオトシゴがお茶を持ってきました。それに感謝しながら三人が円陣を組み、気合いを入れ直します。
「お茶美味しかったよ。ありがとうタツノオトシゴ」
「良く見ればかわいいなこの子」
「僕はぁ男ですよ～？」
「神は、神はこの世にいらっしゃいませんのかくそったれめぇ！」
「さぁ行くぞ！　覚悟はいいか魚介四天王！」
「竜宮四天王です！　貴方達がどんな作戦を立てても無駄なこと！」
「――それはどうかな？　ジャック、狼。手筈通りだ、しくじるなよ」
「了解（ヤー）、任せとけ」
「イエス、桃太郎さん！」
三人がそれぞれ同じ相手に向かって挑みます。
桃太郎は黒き鋼鉄の本マグロ。
ジャックはウミガメ三四郎。
狼は切り裂きシャーク。

やはり戦局は変わりません。すると桃太郎が合図を送りました。それに気付いた二人が動き始めます。
「くらえウミガメ三四郎！」
「甘いですよ！」
「かかったな？」
ニヤリと、ジャックはそれはもう悪い顔をしていました。甲羅の中に閉じこもったウミガメ三四郎の身体を持ち上げます。
「切り裂きシャーク、お前との戯れもここまでだ。がおー」
「きしゃー。シャヒャヒャ、寝言を！」
「金太郎様直伝！　熊手投げ！」
「シャヒャー!?」
切り裂きシャークを掴み、きりもみ回転しながら飛んでいく先にはジャックがいました。先程の仕返しでしょうか？　いいえ、違います。これも桃太郎の作戦通りでした。
「マグロ。お前は確かに硬い。そして強い。だがそんな貴様にも弱点が存在する！」
「この深海のスピードグラップラーである私に弱点など！」
「あるんだなぁそれが」
桃太郎がかがむと、マグロの視界一杯にウミガメ三四郎の甲羅と切り裂きシャークが

飛んできました。それを受け止めます。
「だ、大丈夫かお前達……ハッ!?」
空高く飛び上がる桃太郎とジャックの姿に気付いた頃には時既に遅く、竜宮四天王の敗北は決定しています。
「行くぞ、ジャック!」
「アレだな、桃太郎!」
「アレだとも!」
「よぉーっし、やるかぁアレ!」
「ど、どれなんだ一体いいぐわぁぁぁ!」
慌てふためく間にマグロはウミガメ三四郎の甲羅に押し潰され、干乾びたように口をパクパクとさせていました。その顔に大きな口を開けた切り裂きシャークの顔があります。
「太郎一族秘伝蹴倒術・迅雷!」
「東方公共降下部隊帝国格闘術・ムーンサルトダイブ!」
「これぞ名付けて、必殺のアレ」
「ぐ、ぐふぅ……乙姫……様……無念」
甲羅は割られ、牙は折られ、身体は潰された竜宮四天王の最後は凄惨なものでした。

しかし桃太郎達も消耗しています。
「はぁ、はぁ……強敵だった。こんなんで俺達は鬼ヶ島に辿りつけるのか、桃太郎」
「大丈夫だ。きっと旅の途中で経験値とか溜まってレベルアップするから」
「しねーよ」
「早く地上に戻って骨食いたい……」
「そういえば浦島は？」
「さぁな」

竜宮城の主、乙姫との決戦！

浦島は逃げた乙姫を追って竜宮城を右往左往しました。走れど走れど同じ場所をグルグルと回っているような錯覚に囚われてしまいます。

「乙姫、一体どこへ逃げたというのか……」

しばし悩み、ふと壁を見ると案内板がありました。これこそ天の助けと思い、浦島はその案内板に従って乙姫の部屋へ向かって走ります。道中でエビの妨害がありましたが難なく切り抜けました。

扉をノックすると、中から乙姫の声。

「失礼」

「化粧直し中じゃ、玉座の間で待ってるが良い」

「分かった」

言われた通りに浦島は玉座の間へ戻り、桃太郎達に事情を話します。

「そっかー女は大変だな」

「まぁそれならしゃあない」

「一休み出来るな」

あっはっはと談笑する中、狼の顔色が優れません。
「どうした狼。具合でも悪いのか」
「ま、まぁ……」
「変な物食ったんじゃないだろうな」
「食ってない」
そこに給仕のタツノオトシゴがやってきます。
「もーすぐ乙姫様の化粧が終わるそうですよ～。ですのでスタンバってくださーい」
「任された！　時にタツノオトシゴよ。あそこの生ものを片づけておいてくれないか」
「いえいえ、乙姫様のリアクションを確認してからの方が面白いかと」
「なるほど、一理ある」
桃太郎はタツノオトシゴのセンスに納得しながら準備体操を始めました。
乙姫の攻撃手段は想像もつきません。浦島さえ一戦交えることがなかったのです。その上桃太郎達は丸腰でした。実は巨人の館から拝借した武器の数々は港町での激戦で消耗してしまったのです。持ちこもうにもここは深海に建つ竜宮城。その結果、己の肉体のみで戦う事を強いられていました。
「な、なんと……竜宮の精鋭たる四天王を退けるとは……！　太郎一族、それに部外者二名。忌々しい奴！」

壇上に戻ってくるなり乙姫が激情を露わに声を張り上げます。
「確かに強敵だった。だが倒せないほどじゃあなかったぞ！」
「修学旅行に比べればこの程度余裕だぜ！」
「兎を追っていたかの山に帰りたい」
「雑魚だった」
「実力バラッバラじゃな……だがそんな余裕もここまでじゃ！　タツノオトシゴ！」
「はーい。なんでしょうか乙姫さま」
「そこのマグロ達を片づけておいといてくれ」
「わっかりました～。みんなー」
給仕係が総出で竜宮四天王を玉座の間から片付けていきました。それらが済んだ所で乙姫は煌びやかな着物の袖を振り上げます。羽衣を掴み、桃太郎達と対峙しました。
「ふふん。どこからでも来るが良い！」
「じゃあ俺後ろから攻撃する」
「ならオレは頭上から攻めるか」
「足元からで」
「正々堂々正面から挑もう」
「卑怯臭い奴らじゃなお主ら!?」

「どこからでもいいんだろう！」
「そうじゃな！　参れ！」
「うおりゃあああああああ！」
「ぎゃあああああああああああ!!」
　後ろに回り込んだ桃太郎が蹴りで吹き飛ばされ、頭上から襲いかかるジャックは羽衣に捕まり狼に投げつけられます。転がる二人に浦島が巻き添えを食らいました。
「ば、馬鹿な……四人がかりでこうもアッサリとあしらわれるなんて!?」
「年季が違うのじゃお主らとは。初代太郎一族でも連れてくるが良い、若造！」
　羽衣が揺れた次の瞬間、危機を察知した桃太郎達は身を屈めます。すると柱が次々と切断されていくではありませんか。
「なんて切れ味だ。狼、お前自慢の爪でどうにか出来ないか！」
「死ぬほど熱くて痛いんで無理っす」
「そうか、なら仕方ないな」
「そらそらどうした太郎一族と部外者一人と一匹！　初代太郎一族が死闘の果てに鬼ヶ島に封印した鬼一族を倒すのじゃろう？　鬼ヶ島海底支部、竜宮城で手こずる程度では片腹痛いわぁ、はっはっは！」
「グ、グハァ！　つええぞ乙姫!?」

「ジャック、上、上――！」
「きゃうんきゃうん！」
「これでは近づけん……！」
　乙姫が巧みに操る羽衣はまるで自らの意志を持つかの様に桃太郎達に襲いかかりました。薄手の衣は切れ味抜群、その上狼の爪を通さない柔軟性はタツノオトシゴが使っている洗剤に秘密があります。
「特にお主には失望したぞ、浦島！」
「なに…？」
「初代浦島様との戦いに敗れ、惚れ込んだ弱みさえなければ……お主など！　そして桃太郎！」
「なんぞ？」
「お主もじゃ！　初代桃太郎様はそのように無様な戦いはしなんだ。それで鬼一族を退治などと……恥を知れ！」
「ブーメランパンツ一丁で女に殴りかかる奴に羞恥心を期待するな!!」
「しまったコイツ生粋のバカじゃ!?」
　しかし乙姫の攻撃は休む間もなく苦しめます。
「何か、何か手はないかジャック！」

「見ろ桃太郎」
「なんだ」
「攻撃の合間に着物の裾から覗く太股がすげぇエロイ」
「どおらっしゃあああああ！」
　太郎一族必殺の技、稲荷落としでジャックが空中できりもみ回転すると桃太郎はそれを捕まえて床に叩きつけました。ジャックは玉座の間に突き刺さります。
「なにか手はないかジャック！」
「とりあえずごめんなさい。そして手も足も出ねぇよこれじゃ！　浦島！」
「どうしたジャック！」
「オレはもう駄目だ……後は任したぜ」
「秘孔！」
「うッ！　……ガクリ」
　片隅にジャックを転がし、桃太郎達は何事もなかったかのように乙姫の猛攻を退けました。
「ジャックが戦線離脱か、きついな」
「そうだな」
「お主ら……」

乙姫が何か言いたげにしていますが、桃太郎と浦島は知りません。
「狼。お前の爪でも無理か」
「やってみましたが駄目でしたァー……！」
「狼ぃーーーーー!?」
羽衣に殴られて狼が遠ざかっていきます。残されたのは桃太郎と浦島だけでした。数が減った分攻撃の手はより激しくなります。
「悔しいじゃろう、手も足も出んか？　お主らはその程度よ！　未熟！　青二才！　太郎一族の名が泣くぞ！」
「くっそう、こうなったら……浦島！」
「なんだ！」
「俺が羽衣をどうにかするから一撃で決着をつけるんだ！」
「頼めるか！」
「自信ないけどな」
「ふん、やってみるがいい！　そらそらそらぁ！」
「行け、浦島！　どゅあああ！」
桃太郎を片づけ、浦島を相手にしようとした乙姫でしたが、意外にも桃太郎が善戦したことに焦ります。

「うぉああああああああ無理ぃいいいいッ!!　ぐあああああ!!」
「も、桃太郎ー!!　くそぉ、乙姫ぇぇっ！」
「あああああ――なんとかなったぁ！」
「食らえ、浦島秘伝秘孔殺法！」
　浦島の背後に隠れて見えませんが、桃太郎は羽衣にがんじがらめにされていました。その捨て身の行動により先端が結ばれてしまい、乙姫の攻撃の手段が封じられます。その隙に浦島の秘孔術が乙姫に炸裂しました。
「ぐ、ぐふぅ……見事じゃ……初代浦島、二代目、三代目に次ぐ技のキレ……だが詰めを誤ったのぅ！」
「なんだと!?　ぐはぁっ！」
　浦島もまた乙姫に秘孔を突かれ、身動きが封じられます。
「太郎の血族たる浦島と深い由縁のあるこの我が、秘孔に対する対抗術がないと思うたか！」
「――おっと、そいつはどうかな？」
　乙姫の背後に立つブーメランパンツ一丁の部外者こと、ジャック。気配を隠して忍び寄り、羽衣を奪い去ります。
「しまった、いつの間に！」

「大丈夫か桃太郎！」
「むぐむぐむぐふぐ！」
ミイラ状態の桃太郎を救出する頭上を飛び越えるのは一匹の部外者。狼が浦島の身体に体当たりを仕掛けて金縛りを解きました。
「ハァ、ハァ……廊下長すぎる……」
「狼、無事だったか。ともあれ」
四人が揃います。今度は羽衣も奪い、乙姫は丸腰でした。
「やっちまえ浦島！」
「負けるなよ！」
「頑張ってください」
「任せろ、必ず」
「小癪な。勝てるものか！　参れ！」
「応！」
乙姫と浦島の壮絶な格闘は竜宮城に甚大な被害をもたらしました。

天竺編：奴が来る！　その名は三蔵法師！

次なる目的地へ

「長く苦しい戦いだった……しかし浦島、やったな」
「ああ。乙姫がまさか浦島一族の秘伝技を使うとは思いもしなかった」
「こうして港町に戻ってきたんだし、一件落着だな」
　ジャックの言葉に頷いた二人が腰を落ち着けました。
「これでようやく港町にも平和が戻るはずだ。夜な夜な半漁人がうろついてはたまらん」
「黙ってどうした狼」
「……見渡す限りの荒野に港町の面影が欠片もないんですがこれは……」
　道には瓦礫、建造物の建っていた場所には木材や家具が散らばっています。
　乙姫との激戦、浦島の死闘を演じた竜宮城はその戦いの余波により崩壊。桃太郎達はタツノオトシゴの案内で乗り込んだクジラに運ばれて地上に戻ってきました。しかし見渡す限りの荒野。
「まぁ大丈夫だ。三日もあれば漁師たちも戻ってくる。桃太郎、私はひとまず先代浦島

様に報告をしてこなければならない」
「そうか。なら此処で一旦お別れだな」
「心配するな、すぐに後を追う」
「だが何処で合流する？」
「それならいい場所がある。身体を休めるにはピッタリだ。海沿いの道を駆け抜けていった先の道に、山に囲まれた天竺という素晴らしい場所があるらしい。そこで落ち合おう」
「天竺、なるほど分かった」
　桃太郎は浦島と固い握手を交わし、ひとまずの別れを告げました。
「浦島、お前が旅の一行に再び加わることを楽しみに待ってやらん事もない」
「ふっ、減らず口を。身体に気を付けろよ、ジャック」
「浦島さん、早い帰還を待ってます」
「お手」
「わふん」
　服を着た桃太郎達は天竺を目指して歩き始めました。
「いやー、地上の空気は美味いな」
「まったくだ。竜宮城は生臭いというかなんというか、湿っぽい空気で肌にうるおいが」

「カビてろジャック」
「あぁん、なんか言ったか狼。この野郎！」
「きゃふんギャウン!!」
「そうはしゃぐな、狼」
　狼を追いかけるジャックの後を、桃太郎はのんびりと早足で追います。地上の空気のなんと清々しいことか、胸一杯に新鮮な空気を吸い込んだ桃太郎は新緑の香りに混じる異臭に気付きました。
「ん？　なんだこの臭いは……鼻に付く甘い香り……花？」
　咲き誇る花を見つけますが、それとはまた違った甘い香り。
「おーい、桃太郎、大変だ」
「どうかしたのか」
「狼の奴が白目むいて痙攣しながらわけのわからない言葉を発してるんだがどうすればいい」
「俺達は犬じゃないからなぁ、流石になに言ってるのかまで分からない」
　桃太郎が白く美しい花を眺めていると、女性の声に呼び止められます。
「ん？　どこからだ？」
「もしもしー、其処の方！　ここです、私はここなのでーー！」

「あ、いた。こんにちわ、小さいお嬢さん」
花の一つになんと綺麗なドレスをまとった女性がいるではありませんか。その大きさは片手に乗るほど小さなものでした。
「私は親指姫。これからどちらに?」
「天竺に向かおうと思っていました。もしやお嬢さんも?」
「はい。実はお供の雀が何者かに襲われてしまい、私はここで途方に暮れていたのです。どうかお願いします、私も連れていってくれませんか?」
「そういう事ならお任せを」
「まぁ、ありがとうございます。私は動物の言葉が分かります、何かお役に立てるといいのですが」
「では早速。おーい、ジャック!」
「ＹＥＡＨ！　なんだ桃太郎。狼引きずるの手伝ってくれ」
「動物虐待！　ひどい！」
「あれは人食い狼です」
「そうでしたか、すいません。早とちりを」
「今は旅のお供です」
「どういうことですか!?」

桃太郎は事情を四百字詰め原稿用紙一枚に簡潔にまとめて親指姫に説明すると、理解を示したようです。そして白目で痙攣する狼の言葉に耳を傾けると、親指姫は桃太郎の肩で唸りました。

「なにか分かりました？」

「なに言ってるかさっぱりわかりませんでした」

「むむむ、親指姫でも無理だったか」

「起きろってんだ、この犬ッコロ！」

「ギャぷん！　ハッ、此処は俺、何処は私」

「太郎一族流気つけ！」

「ドッセイ！　おはようございます、桃太郎さん、ジャック」

「よし、治った」

「す、凄いです！　もしや貴方は太郎一族に縁のある方ですか」

「如何にも。私は桃太郎、鬼退治をする為の旅をしている最中なのです」

肩で喜ぶ親指姫は落ちそうになりますが、それを桃太郎が支えます。

「しかし、親指姫は何故旅を？」

「それはですね、七人の小人作戦をご存知でしょうか？」

「七人の小人作戦？」

「ああ、アレか。知ってるぜ。赤鬼、青鬼と手長足長の四匹の本土進攻の際に選ばれた七人の精鋭による隠密作戦だろ。結果は成功、しかし生き残りも少なかったという」
「詳しいなジャック」
「ＨＡＨＡＨＡ、そりゃそうさ。俺の上司がその作戦の司令官だったからな」
「そうです。その作戦で辛くも生き残った一人、一寸法師を探しているのですが……」
「なるほど。それで一人旅を……どういった関係で？」
「こ、ここ恋人です……」
　照れ臭そうに頬に手を当て、身体を振る親指姫の反応はとても愛くるしいものでした。
「こんなかわいらしい恋人を放って何処に消えたってんだ、その一寸法師って奴は」
「分かりません。ただ噂で聞いたのですが……天竺に」
「天竺に居る、と？」
　桃太郎の問いに、親指姫は首を横に振りました。
「いえ、天竺に向かっている、かの有名な一行の中ににその姿があったと」
「その一行とは、一体」
「かつて安倍清明と旧友でもあった三蔵法師です。今は魑魅魍魎の群れを率いて天竺を目指して進軍しています。嗚呼、その中に一寸がいると思うだけで私は……」

「泣かないでください親指姫。もしそこに一寸法師がいたのなら貴方が止めるべきです」
「はい。必ず連れ戻します、ぐすん」
　しかし、桃太郎達は目指している天竺を狙う三蔵法師の脅威に固唾を飲み込みます。
　名前だけならば桃太郎も聞いたことがありました。太郎一族に影ながら力を貸していた妖術師として耳にしていましたが、まさか妖怪を引き連れているとは思いもしません。
「三蔵法師の目的は一体」
「妖怪の天下、そして鬼一族の開放であると私は長靴を履いた猫から聞きましたけれど、果たして本当なのかどうか……」
「三蔵法師と言えば孫悟空、猪八戒、沙五浄の三匹が厄介だな。あいつらの実力は一夜で都を滅ぼすほどと聞く」
「乙姫の次は三蔵法師か……相手にとって不足はない。だが問題は数だな」
　軍勢を率いて天竺に向かっているとなれば桃太郎達も正面から挑む訳にはいきません。浦島が先代の下へ報告に行った為、強力な戦力が不在なのは桃太郎としても痛みます。しかし、天竺に三蔵法師一行が到着する前に合流できる事を信じて桃太郎は天竺に向かいました。

辿り着くは極楽浄土！　ここは天竺

天竺に向けて歩き続けて早三日。その道中もまた波乱に満ちた道のりでした。

立ちはだかる凶暴山菜による壮絶な森林伐採。襲いかかる猿の生首。道すがらに語りかけてくる蛙の軍隊。その戦いを乗り越えてまた一歩、桃太郎は仲間との絆を深めました。

「むっかしーむっかしーうーらしーまはー」

「ＹＥＡＨ！」

「たーすけーたかーめにーつーれらーれてー」

「Ｆｏｏ！」

「りゅーぐーじょーに行ってみ―ればー！」

「そこは地獄の阿鼻叫喚！」

「おのれ乙姫！　許さん！」

「そして我々は竜宮四天王と死闘を繰り広げ、見事勝利！」

「おつかれっしたー！」

『イエエエエエエエ！』

ハイタッチで盛り上がる桃太郎とジャックの手をうんしょうんしょと昇った親指姫も小さな体でハイタッチします。
「い、いえー！」
「おい桃太郎！　あれを見ろ！」
「まさかアレは、この地域一帯に伝わる伝説の生き物！」
「どっからどう見ても化け物だアレー!?」
「背中に四つの羽を生やし、尻尾からは破壊光線を放つ蛇を自在に操り、腹に環境汚染粒子を溜めこむ器官を内蔵した伝説の生もの！」
「かたくなに化け物と認めようとしない!?」
「真っ赤なおべべは虐殺者の証！　鋭い爪先はタンスの角も切り裂くという！」
「そして煮込んで食うと天にも昇る絶品と噂のイヌ！」
「わー、アレがイヌですか。私初めて見ました」
「親指姫……貴方だけはまともだと信じていたのに……！」
イヌ（？）は桃太郎達を見るなりゆっくりと歩み寄ってきました。天竺の周辺地域一帯の守り神でもあるイヌに手を合わせて拝みます。
「ありがたやー」
「ありがたやー」

「ありがたやー」
『ピーガガガ……ガ、ピー……コンニチワ、旅ノ方』
「喋ったぁぁぁぁぁ！」
『ウルサイ、狼。黙ッテロ』
「すまんかった」
「まさか天竺に向かう途中で伝説と名高いニッポンヤマイヌを見ることが出来るとは」
『ガガ、ピー……ウィーン――天竺。テンジク、ナラスグソコデス』
　尻尾で指し示す先には天竺までの距離が書かれた看板が立て掛けられてました。
ジャックがそれを見ていると掠れた文字で案内が書かれているではありませんか。
「ん～？　なんだこれ」
「ジャック、天竺まで後どれぐらいだ」
「ああ、あと二十光年と書いてある。もうちょっとだな」
「こ、光年!?」
「なんだ、あと二十光年か」
「どういう単位なんですか？」
「大体一光年で十五太郎です。そして一太郎は凡そ三メートルです。なので一光年は四十五メートル、残り九百メートルです」

「なんで一キロじゃないんだ……」
『ロボチガウロボ……ソチラハ近道、危険危ナイ一杯、ダカラ、ソッチ進ム推奨』
掠れている文字を解読しようとジャックが目を凝らします。
「えーとなになに？　……コ、ノ先……足長、様の……本拠地？　一泊驚きの低価格２９８……安いな」
「ああ、安いな」
「ではそちらで」
「ちょっと待ってください」
『足長、今イナイ。泊マルナラ、イマノウチデス。ゲヘヘヘ』
「なるほど。じゃあこっちで」
「敢えて危険な方を選ぶ桃太郎さん素敵！」
「狼、索敵だ！」
「頑張れ狼！」
「カチカチ山に帰りたい……」
ニッポンヤマイヌの進言を心苦しくも丁重に断り、桃太郎達は敢えて近道である二十光年（みつとし）を選びました。
「それにしてもジャック、よく読めたな。あの看板、東西南北中央古代バビロニアンハス

キー語源象形文字で書かれていたのに」
「通信教育にはまってた時期があってな、俺に読めない文字は沢山ある」
「私も始めてみようかしら、通信教育で雄豚の育て方」
「もう嫌だこのパーティー……」
ザッ……――和気あいあいと話をしながら遠ざかる一団の姿を観察する姿。バイザーから漏れる赤い光に表示される『失敗』の二文字に、脇から過剰エネルギーを排気しました。その影から現れるのは異様に長い足を持つ化け物です。
『誘導、出来マセンデシタ。引キ続キ、天竺周辺、警戒シマス』
「よろしい。ホップ・ステップ・ヒップホップでヘイヘイホーを忘れるなよニッポンヤマイヌ」
『ワタシニポンゴワァカリマセーン』
「Ｏｈ……」
「もーもたろうもーもたろう！」
「おっこしーにつーけたきーび団子ー」
「ひっとつー私にくーださいよー」
「欲しければ奪え！　勝ち取れ！　恵まれようとするその軟弱な精神こそが弱肉強食における敗者の発想！　欲しければ奪ってみせろ、俺の命は食物連鎖の頂点に立つかもし

れない夢を見たー！」
「きゃっきゃ」
　ボロボロのつり橋を桃太郎とジャックが駆け抜け、狼が連続バク宙で乗り越えます。
「赤巻紙青巻紙黄巻紙！」
「朱巻紙蒼巻紙黄巻紙！」
「ポマード！　ポマード！　スペースピーポーべっこう飴！」
「禿げ上がるほどのフラストレーション！」
　坂道から転がる大岩の雪崩もコンビネーションで見事に切り抜けました。
「そして到着！」
「天竺！」
「はい！」
「長い道のりだった……」
　まるで要塞のような外壁に囲まれた場所こそが天竺です。まだ作業の途中なのか日本日曜大工連合会の会員であるお父様方が三連装荷電粒子砲の取り付けを行っていました。
　跳ね橋が下ろされ、桃太郎の顔を見た受付が驚きます。
「も、もしや貴方は中南米の密林で外宇宙狩猟民族と地球外生命体の儀式に巻き込まれ

て生存したとかつてニュースで報道された第十三代目桃太郎様ですか！」
「如何にも、私は桃から生まれた桃太郎。しかしそんなに有名だったとは……」
「ああ、その肩に座っていられる方は私の見間違えでなければ数多の戦場で幾多もの屍の山を築き上げたジェノサイドプリンセス、通称鮮血の親指姫様ではありませんか？」
「あらやだ、私も有名になったものね」
「すいません、うちペット禁止なんですよ」
「大丈夫だ。これは私の非常食だから」
「じゃあ大丈夫です。桃太郎様、どうか天竺をお助けください！」
「話は親指姫から聞いているよ。まずは宿をお借りしたい」
　こうして無事に天竺へと辿りついた桃太郎達は中へ案内されました。そこは外壁とは裏腹に桃源郷と見紛うばかりの平和な土地です。それがあんな外壁を建造しなくてはならなくなってしまったのも三蔵法師が侵略してくるという話を聞いてからです。おのれ許すまじ三蔵法師、と桃太郎が思ったのかどうかは定かではありません。
　案内された宿で桃太郎は天竺を治める長と話しあいの場を設けられました。
「貴方様も噂くらいは聞いておりましょう。三蔵法師、かつては善良な行いによって妖怪を救済してきた者の名を。それが今、悪しき行いによって魑魅魍魎を従えながら此処へ向かっているという由々しき事態なのです」

「そこまでは聞いています、この親指姫から」
「一寸法師を知りませんか？　私との婚約を目前にして打ち出の小づちと共に姿を消した」
「一寸法師ですと!?　……やはり、あの噂は本当でしたか。実はですな、親指姫様。三蔵法師の肩に、今丁度貴方が桃太郎様の肩でそうしているように一寸法師が居た、と」
「嗚呼、なんてこと……このままでは私は一寸を殺してしまわなくてはならなくなる。どうしましょう、物凄く楽しみで私、胸が高鳴ってきました」
「落ち着いてください親指姫。そのせめてもの対策に、あのような外壁を？」
「天竺の景観を損なうのは百も承知です。しかしそれ以上に私たちは此処を守る使命があります」
「それにしてもなぜ三蔵法師は天竺を？」
「実は、三蔵法師のツイッターで「このツイ―トが１００ＲＴされたら天竺目指して旅するわ。空気安定マジ余裕」とつぶやいた所、孫悟空、猪八戒、沙五浄の三人から拡散希望のタグ付きで広められ、僅か半日で目標を達成してしまわれたのです」
「三蔵法師……奴もまた悲しみを背負うものだったか……」
　桃太郎は自らと同じ境遇であった三蔵法師に目頭を押さえました。ジャックは必死に涙を堪えています。

「しかし、敵となるならば手加減はしません。我々にお任せください。後から浦島も来るはずです」
「なんと、桃太郎様だけでなく、あの浦島太郎様まで……これは心強い」

――その頃、浦島。
「……この先足長様の本拠地。一泊２９８円……安いな、こっちにしよう」
『毎度アリ。アリアリガッテン』
「急がば回れとも言うからな。ありがとう、初代太郎一族のペット、伝説のニッポンヤマイヌ」
『昔ノ、話デス……』

決戦に備えて豪遊！

天竺を案内されてわかったことは、やはりここがすばらしい場所であるということだけでした。

「メシはうまい！」

「はい！」

「空気もうまい！」

「はい！」

「美人も多い！」

「はい！」

「みんな親切！」

「はい！」

「親指姫よ！」

「なんでしょうか！」

「耳元で元気に返事しないでください。私の鼓膜が弾け飛びます」

「ごめんなさーい！」

親指姫は桃太郎の肩が気に入ったようです。それをやや後ろからジャックと狼が眺めていました。
「なぁ狼よ。今思ったことがあるんだが」
「自分の頭がおかしいことに？」
「それは諦めてる。今も親指姫のスカートが覗けやしないかと血眼になってるところだ」
「充血してると思ったらそんなことに……」
「いやなに、大したことじゃあないんだが。……親指姫はもともとジェノサイドプリンセスなわけだろう？」
「話によれば」
「じゃあ一寸法師はなんなんだろうな」
「……さー？　あ、あそこで骨売ってる！」
「そんなのに食いつくのお前くらい」
「マジで！　美味そう！」
「いい骨ですね！　ツヤといい保存状態といい、削りだした人は腕がいい解体師なんでしょうか！」
「お前らも食いつくのかいぃ!?　あ、フライドチキン美味そうだ」

四人は骨をかじりながら天竺を歩いて回ります。
「それにしても三蔵法師達が到着するまで三日の猶予があるのか。それまでに浦島は到着できるのか?」
「大丈夫だジャック。お前は知らないだろうが、その昔浦島は先代金太郎様のペットである熊とかけっこして勝ったこともある」
「それはすごいのか?」
「ああ凄いとも。一日三千里走るといわれている熊に勝ったのだから」
「そいつはすごいな」
「まぁ秘孔を突いただけなんだが」
「反則勝ちか……」
「お山のカチカチ大惨事かけっこ大会か、懐かしいなぁ……三冠を果たしたミドリガメさんは凄いですね」
「ああ、あの方は凄いな。なんせ大地からエネルギーをもらって空を飛ぶ」
「走ってくれ、ミドリガメ……」
しかしそれもおじいさんが桃太郎を拾うまでの話。桃太郎の脳裏には大人げもなく残像を残しながら木々を飛び移り、参加者を翻弄して優勝するおじいさんの姿がありました。それを追うおばあさんの表情は、それこそ鬼気迫るものがあったものです。

「そうだ、今の話で思い出した。きび団子は売ってないだろうか」
「あそこに土産屋がありますよ桃太郎さん」
「よし、行こう。たーのもー、きび団子なんぞ売ってませんかねここのお店！」
「いぇらっしゃい！　おばあさん印のきび団子ならそこにあるよ！」
「おばあさんの写真がまるで遺影のようだ！　ではこちらを」
「えーと旅人割引でお会計はこちら」
「ひぃ、ふぅ、みぃ、ＹＯ」
「ぴったり丁度いただきます。毎度ありー」
　すっかり堪能している桃太郎でしたが、何かを忘れているような気が……？　しかし忘れるということは些事であるということ、桃太郎はすぐに歩き始めます。
　その頃、ジャックと狼は偶々見かけた店の前で立ち止まっていました。
「……狼よ」
「なんだジャック」
「この店は、なんだ？」
「土産屋です」
「そうだな。ならば、その名前は？」
「土星屋です」

「紛らわしいわ！　たのもー！」

日が暮れるまで天竺で遊び歩いた四人は宿へと戻って来ます。そして借りている一室で早速作戦会議を開きました。

ちゃぶ台の上に広げるのは天竺周辺の地図です。そこにジャックの指が乗せられました。指し示されるのは一本の山道です。

「俺の予想では、ここから来ると思っている。三連装荷電粒子砲の建設が急ピッチで進められているが完成までにまだ――」

「あ、完成したっぽいぞ。祝福の儀式で花火打ち上げて喧嘩神輿始まってる」

「わー、汗と血と男達の友情が飛び散ってますねー」

「骨ウメェ……この味は、間違いなく豚……！」

「俺風呂行ってくるわ……」

「ああ、なら俺も行こうジャック」

「じゃあじゃあ私も行きます！」

「じゃあ骨食ってます。あぐあぐ」

「ウラアアアアアアアアア、ヤアアアアアアアアア！」

「キエエエエエエエエエェ、キャアアアアアアアアア！」

「セアアアアアアア、ウホッホオオオオオオオオ！」
「誰か担架持ってこーい！　三丁目の土産屋の店主の友人の従兄弟の娘の旦那がトリプルアクセルから華麗に着地してギックリ腰だー！」　天竺では完成を祝っての喧嘩神輿で男達の熱い祝福が行われています。その熱気に隠れ潜む妖怪が一匹、天竺に侵入しようとしていました。
「ふひひ、まさかここから侵入されるとは思いもしなんだろう……人間達め」
　三蔵法師の手下が一人、猪八戒です。周囲を見渡せど人っ子一人居ません。それもそのはず。そこは天竺名物『極楽浄土真宗ブッダ温泉』まで通じる道なのですから。均された道に出た猪八戒は足音を潜ませながら天竺へ向かって急ぎます。
「ん、なんだぁこれは？　『極楽第三の湯：混浴』……」
　寄り道してもいい。猪八戒は自分にそう言い聞かせました。思えば天竺に侵入するという危険な任務も沙五浄が適任であるのに、なぜ猪八戒がやらなくてはならないのか。同郷の出身というだけの理由で三蔵法師に無理強いされたからです。
（一目でいいから見ておくか。そうだ、これはあくまでも危険がないかという理由であってだな……）
　物音を立てないよう静かに接近した猪八戒の前にそびえ立つのは覗き防止の為の囲いでした。ですがそれも妖怪である猪八戒には意味がありません。まずは聞き耳を立

てます。
『ふんふんふー……』
（ほうほう、人間の女がひと……り……え……？）
『八つ裂きチャーハン食ーべ放題ー。刻んでおろしてかき混ぜてー、焼いて炒めてざっざっざー』
『食らえ、桶による桶の為の桶狭間の合戦を制した鉄壁のぉタオル！』
『なんのこれしき！　食らえ、タオルのタオルによるタオルのために行われたバスガスコールタール！』
『おのれ、水鉄砲とは卑怯な！』
『ふはははは、水辺で俺に勝てると思ったか！』
『ぶったーぶったーぶっつ切りー。煮ても焼いても美味しいのー、サイコロ切ってモッグモグー。チャーシューチャーシューおいしいよー』
（……かかわらないほうがよさそうだ）
　生唾を飲み込み、そっと離れようとしたその時。猪八戒が足を滑らせて尻餅をついてしまいました。
『なんだ、今の音？』
『豚じゃね？　猪か』

『あーいいですね、猪も。最近刻んでませんでした。今度狩りに行きましょうよ』
『いいですとも！』
『俺の猟銃も最近使ってなかったな』
（ナイス、バカ集団！　これだから人間相手は楽でいい！）
猪八戒は安堵して脂肪で張った腹を撫で下ろし、天竺へまんまと侵入することに成功しました。
どうやら宿の裏のようです。ゴミ箱がおいてあるということは厨房のすぐそばであるということがすぐに分かりました。人影も、気配もありません。
これは余裕だ、そう思い先を急ぐ猪八戒の背後に迫る影――その手には……

来るなら来てみろ三蔵法師！

「いやーいい湯だった」
「ホッカホカだ」
「ふにゃ～」
「ジャック！　貴様に果し合いを申し込む！」
「望むところだ！　風呂上りといえばこの決闘に限る！」
『卓球！』
「ちょっと待ったぁー！」
『止めないでくれ親指姫！』
「お風呂上りにはしっかり水分補給ですよ！」
　桃太郎とジャックはラケットを持ってすっかりその気でしたが、親指姫の必死な牛乳アピールに一度ラケットを置きました。
「命拾いをしたな、ジャック」
「ハハハ、ぬかせ、桃太郎。お前の方こそ……」
　互いに指を指しながらテーブルを挟んで二人は親指姫が持ってきた牛乳ビンを手に

取ります。
「宣誓ー、我々はー正々堂々スポーツマンシップに則りー」
「正面から眼前敵の粉砕を心に誓います」
「この契約内容を互いに合意の下として、乾杯！」
「乾杯！」
「かんぱーい！」
グビグビグビ、プハー。ゴクゴクゴク、ゲフゥ……グイッ。
「ツプハァ、ツシャーオラー！　行くぞ桃太郎！」
「ツサーいくぞー！　先攻は頂いた！」
「おう、望むところよ！」
「俺のターッ、サァッ！」
「ナイッサー！　トゥラァー！」
先攻は桃太郎です。手首のひねりを加えたカットから始まったサーブは華麗にネットの上を通り、ジャックは順当に返しました。それからしばらく二人は勘を取り戻すためにラリーを続けます。
「牛乳美味しいですわぁ。ぐびー」
親指姫はそんな二人を観ながらストローで紙パックの牛乳（３５０ｍｌ）を飲んでい

ました。一リットルを飲み干した二人は激しい動きで浴衣が着崩れていきますが、そんなことはおかまいなしに半裸で卓球に熱中しています。

「……ガタッ」

これにはさすがの親指姫も立ち上がってしまいました。

「これは熱くなりますね」

じゅるりとヨダレを拭います。

「ふふふ、ここらでいいか」

「おう、サーブはくれてやる桃太郎。俺たちの勝負はこれからだ」

体が温まったところで桃太郎がピンポン玉を手に取りました。勢いの止まらないそれは煙をあげながらようやく止まります。

左手の上に乗せ、ラケットを構える桃太郎の姿は真剣そのもの。対するジャックもまた肩を一度回してから腰を沈めました。

「行くぞぉおおお！」

「ッシャーオラァアア！」

「貴様の心臓目掛けて灼熱豪華絢爛舞踏祭弾ッ！」

「なんのこれしきぃ、ふぉおおお唸れ右腕！　今必殺のダイナマイトクロスボンバー！」

（こいつ、あの剛速球にドライブをかけて返しやがった！　おのれジャック、腕を上げた

な！）

（どうだ、桃太郎。暇を見つけては手首のスナップを鍛えてきた俺のドライブは！）

「そんなお前に敬意を評して、ダイレクトアタァァァック！」

「ヴォ、ヴォンバァァァァァ!!」

「ああ！　なんてこと、ジャックさんがピンポン玉の直撃を……んん～～、ジャッジは顔面セーフで！」

――桃太郎、お前って奴ぁ……！　いい弾、打つじゃねえか

――どやぁ……。

血と汗と迸る情熱。そして飛び交うピンポン玉。いつしか桃太郎とジャックの卓球勝負は拳で語り合ってました。

「はぁ!?　何言ってんのお前!?　今のは明らか俺のルールじゃノーだし！」

「何言ってんだお前!?　ネットに引っかかって打ち返したじゃない！」

「そのネットに焦げ跡ついて貫通したんだが!?」

「おのれジャック、一点くらいいいじゃないか」

「いいや、良くないね。その一点が生死を別けるんだからな」

「なら仕方ないな。ここは公平にお互い一点追加でどうだ」

「……うむ、そうしよう」

「すいませーん、牛乳おかわりー」

――そんな二人の決闘から一夜が明けた、翌朝。

「ハァイハイ、起きるヨー！　朝ごはん出来てるヨー、食べないとワタシ困っちゃうねー」

女将が起こしに来て、三人と一匹は眠気を引きずりながら食堂に降りました。

「はぁーいお待たせよー」

「……えー、今朝のメニューは」

「フフン、ご覧の通り。超濃厚ドロリチャーシュー豚骨ラーメン！　出来たてホカホカ超新鮮、新メニュー！」

「さすが女将の粋な計らい。いただきます」

「いいのかそれで桃太郎。ツッコミはなしか」

「はいそっちのワンちゃんにはほねっこマシマシドッグフード」

「うまうまモグモグ」

静かな朝食を食べていると、街中に響く警笛。誰かが叫びます。

「大変だー大変だー！　思ったより早く三蔵法師と思わしきハゲとその妖怪達が近づいてきてるぞーーー！」

「なんだってズルズル大変だモグモグ、想像以上に、濃いっ……！」
「なら俺たちも早くモグモグ行かないとだな。チャーシューうめぇ」
「そうですねぇモキュモキュ。ああ、ダシが聞いていて骨の旨みが堪らないです」
「ガツガツハグハグモグモグペロペロ」
「すいませーん、女将さん。ちょっと食器持って行ってきていいですか？」
「いいヨー。食べ終わったらちゃんと持ってきてねー。気をつけてー」
　旅館を後に、桃太郎たちは超濃厚ドロリチャーシュー豚骨ラーメンをすすりながら様子を見に行きました。
「ズルズルー。三蔵法師が来たそうですね」
「ラーメン臭ッ！　ああ、桃太郎さん達でしたか。ええ、予想以上に三蔵法師たちの到着が早くて……」
「もっちゃもっちゃ。おい桃太郎あの方角なら俺たちが遊びながら作ったトラップの……」
「ああ、そういやそうだ。どれぐらい効果があるかはわからないけどな。ズズズー……ん、このスープはなかなかイケるな」
（ラーメン片手になんて余裕だ。これが太郎一族の貫禄！　でも朝からラーメンってどうなんだその食生活……！）

「ふふふ、あれが天竺。見えてきましたね」
「そっすねー」
「というか豚が遅くないっすか」
「とうですね、まぁ豚ですし」
「やっぱ河童が行けばよかったっすねー」
「そやな」
「お黙りなさい、孫悟空、沙悟浄。元はと言えばお前たちがあそこまで拡散したのが旅のきっかけなんですから」
　三蔵法師は白馬に跨りながら妖怪たちの軍勢を率いて進軍しています。そして城壁を見上げ、足を止めました。
「あれ、私の知ってる天竺と違う。どういうことですか孫悟空！」
「俺っすか!?　えー、なんでも最近大掛かりな改修があって景観ぶち壊しって話を聞いたことが」
「つか、その原因俺たちじゃねーんすかね？」
「……進軍！　目的地はもうすぐそこです！　行きなさい貴方たち、一番乗りは譲りましょう！」

『ヒャッハァー！　温泉だー！』

地鳴りのような響きと共に勢いよく駆け込む妖怪たちでしたが、その先陣を切っていた部隊が突如として消えました。

「落とし穴だと！　なんて前時代的なトラップを……！　おのれ小癪な！」

「助けてくれー！　助けてくれー！」

「ぎゃあああー！　なんだこの虫の群れ！　イタイ痒いンギモヂイイイイイイ!!」

「ええい、何を怯んでいるのですか！　早く行きなさい！」

『一番乗りは、この俺だぁあああ!!　あああああ――――……!!』

「ああ、今度は落石に巻き込まれた!?」

まさに阿鼻叫喚。次々と妖怪たちが仕掛けられた罠にはまっていきます。

思いつく限りの虫を入れた落とし穴。爆薬を巻いた大岩。続いて地雷原。

「ぎゃーーーー!!」

「ぐわーーーー！」

「助けてくれー！」

「なんだこりゃあ！　うわーー！」

「逃げろー、スカラベの大群だーー!!」

「ああ、まさかあれは！　あれは！」

地獄絵図。いえ、地獄でも早々見られないような、鬼も泣き出す光景が今、三蔵法師たちの前に広がっていました。

極めろ必殺のスープレックス！

気づけば三蔵法師の引き連れていた大勢の妖怪達は誰一人天竺にたどり着くことなく果てていました。

「これが天竺流の歓迎ですか……」

「どう考えても罠だったでしょうに」

「ええいやかましいですよ猿」

「確かに俺は猿ですがそんんじょそこらの申と一緒にしてもらっちゃあ困ります」

「誰が困るというのですか」

「いや、そりゃ俺がですね……」

「しかしこうも盛大に歓迎パレードを受けてしまうと嬉しさのあまり失禁しそうです。天竺マジ怖い場所、地上の楽園とはこの世ではなくあの世のことだったのでしょうか」

「法師、微妙にテンパってません？」

「誰が天パーですか。私の髪はサラサラのストレートですよ」

「ハゲのくせに……」

「ハゲとか言ってんじゃありません十円ハゲ」

「俺が十円ハゲならアンタは全面ハゲだろうが！」
三蔵法師と孫悟空が痴話喧嘩をしていると、沙悟浄が死屍累々の天竺ロードを歩いてくる人影を見つけます。
なぜか全員が揃ってドンブリを持っていました。
「まさか、あれは……！」
「どうかしたのですかエロ河童」
「俺はエロくない。性的な興味はない」
「それで、一体何が……？」
砂煙が晴れていき、その姿を目にした三蔵法師達が驚きに染まります。
「お、お前はまさか！　ここ最近ツイッターで呟いていなかった下から三番目のフォロワー、桃太郎！」
「久しいな三蔵法師！　今でも覚えているぞ、お前から貰った馴れ初めの返信！　俺は日本一（予定）の桃太郎！　かつてのフォロワーと言えど情けは無用だ、覚悟しろ！」
桃太郎は木刀を突きつけると高々と宣戦布告しました。その肩に乗っていた親指姫も同じように真似します。
「愛しの一寸法師様を返してくださいませ！」
ジャックと人食い狼はスープを飲み干すと腕を組んで考えます。

「人食い狼よ、このラーメンはどうだった」
「美味いのは間違いなかったがスープまで飲むには少し濃厚過ぎた。しかしチャーシューのとろける様な食感は流石」
「麺もツルツルシコシコで喉を軽く通るし、ミスマッチとは思ったが思いのほか相性が良くて驚いてる」
「お前らラーメンの評論してないでちゃんと自己紹介しろ」
「俺はジャック！　部外者だ」
「俺は人食い狼！　趣味はボランティア！」
「私は親指姫！　趣味は裁縫です」
「お見合いか！」
　ですが桃太郎がいるならば合点がいきました。
「成る程、そういうことか。かつて南米密林で以下略！　そのお前たちがいるのならばこのトラップの山々は説明がつく！」
「俺達が！」
「一晩で！」
『頑張りました！』
　桃太郎とジャックが自分を指差しながら堂々と宣言します。

「天竺の皆様方にも協力して頂きました。本当にありがとうございます」
「まさか薬局であの毒虫達が全部手に入るとは思わなかった。いい品揃えの店だったよな桃太郎」
「ああ、さすがは天竺だ」
「その店は本当に薬局だったのか!?　ええい、とにもかくにも貴方達を倒さなければ夢にまで見た天竺にたどり着けないと言うのなら倒すまでです！　さぁ孫悟空、沙悟浄。行きますよ！」
「承知っす」
「了承ー」
　三蔵法師が手綱を引くと、白馬が嘶いて駆け出しました。それに追従する脚力はさすが妖怪である孫悟空と沙悟浄。
　しかしその前に立ちはだかるジャックと人食い狼が二人を止めました。頭上を飛び越える白馬を見過ごした桃太郎がハッとします。
「しまった！　ジャック、狼！　そこは任せた！」
「おう！　あの全面ハゲを任せたぞ桃太郎！」
「頑張ってください桃太郎さん。あのカツラハゲを倒して帰ってきてくださいね」
「ああ、俺がハゲになんて負けるはずがないだろう！　親指姫、しっかり掴まっていてく

ださい！　走れ俺、おじいさんの如く！」
　桃太郎が白馬を追って走り出しました。
「ええいどきやがれってんだ犬っころめ！」
「誰に向かって口聞いてんだ猿！　脳みそ食うぞ！」
　孫悟空は人食い狼に如意棒を突きつけます。その変則的な攻撃に人食い狼も苦戦していました。
「お前の相手はこの俺だ！　とっ捕まえて博物館に展示してやるぞ河童！」
「ほう、面白い。やってみろってんだ！　人前に出れば物珍しさから追いかけ、相撲で負ければ尻子玉を抜き、故郷の青い水を公害で汚した人間なんかに」
「話がなげぇ！　五・七・五でまとめろ！」
「にんげんめ！　おのれゆるさん！　かくごしろ！」
「分かりやすい、それでいい！」
　ジャックと沙悟浄の戦いも同じく火蓋が切って落とされます。巧みな銃捌き、ですが互角かそれ以上に沙悟浄も月牙を操って銃弾を防ぎきりました。銃というのは撃ったら弾が尽きるもの、ジャックはすぐに弾切れに追い込まれます。それを機に、一転攻勢となった相手から逃げ回りました。
「どうしたどうした人間、その程度か。銃に頼らなければ何もできないのか貧弱なやつ

め！」
「だるまさんが、転んだ！」
「古典的な引っ掛けなんぞに引っかかるかー！」
「かかったな馬鹿め！」
　逃げていたジャックが突然足を止めて取り出したのはラーメンのドンブリ。その中には飲みかけのスープが入っていました。生ぬるい超濃厚豚骨ラーメンのダシが利いたスープが沙悟浄の顔面を襲います。
「眼がぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
「オラオラァ！　有り難く食いやがれ紅しょうが！」
「フゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!」
　口いっぱいに紅しょうがを詰められた沙悟浄が苦悶の表情を浮かべますがジャックはことここに至っては手加減なんてしません。徹底的にやり抜きます。
「コショウは嫌いか？」
「ゴッフォ、ゲッホッゲッホ、フヴァァ！」
「お前の顔面スバイシーな具合に仕上がってるぞ」
「小馬鹿にしやがヘッブシ！　しや、しやがっデェップン！」
　怒り心頭の沙悟浄ですが鼻の穴に詰められたコショウの瓶の名残が尾を引いて中々

喋ることが出来ません。気がつくとジャックは背後に回っていました。
後ろから羽交い締めにされ、両手を拘束するとジャックはやせ細った沙悟浄の身体を軽々と持ち上げます。
「俺の持つ技の一つだ、ありがたく受け取れ。投げっぱなしタイガースープレックス！」
そのままジャックは後方に身体を反らしながら倒れました。頭から地面に激突した沙悟浄はたまったものではありません。受身のとりようもないのですから無理な話でした。
脳天を文字通り割られるような衝撃に襲われ、沙悟浄は泡を吹きます。
「――――」
「とっておきの〝ダメ押し〟という奴だ！　俺のこの技を食らって生きていたのは桃太郎だけだが、果たしてお前はどうかな？」
ブリッジの体勢から沙悟浄をうつ伏せに寝かせると更に身体を持ち上げ、全身の筋肉を総動員させてもう一度タイガースープレックス。まだまだジャックの技は続きます。
沙悟浄の身体を持ち上げた瞬間に拘束を解き、浮き上がった一瞬で後ろに振り返りながら脇を掴むと頭から叩きつけました。
「フンヌァ！　これぞ必殺、ロコモーション爆撃タイガースープレックスだ」
しかしその言葉は沙悟浄の耳に届くことはありません。既にこの世を去っているか

らです。
「俺が銃だけだと誰から聞いた？　ん？　人間をなめるなよ妖怪め」
久々の大技にジャックは肩を慣らしました。果たして桃太郎は大丈夫でしょうか。
それだけが心配でした。

おまえどの面下げてここに来た！

――走る。ひた走る。有酸素運動。燃え上がるほど燃焼系。剛毛の生えた心臓の鼓動がファッキンホット。

「待てぇぇぇいっ！　待て待て待てぇぇぇぇぇい！　白馬のお坊さん待てェェェェイ！　ま、待って！　お願いだから止まって！　ちゅらいからぁ！」

「むしろ馬と付かず離れずの距離を保つお前の方がおっそろしいわ！　どういう脚力しているのですか！」

「マッッッテッッ　!!!!」

「迫真過ぎる！」

桃太郎は天竺目掛けて走る三蔵法師の愛馬のケツを凝視しながら追いかけていました。前回の投稿から四年の月日が流れています、今さらどの面下げてこの物語へと帰ってきたのか鬼ヶ島。しかし、彼らはそれでも走り続けます。決して届かない理想の地、天竺へ向けて。

「ここまでのあらすじを冥土の土産に教えてやろう！」

「余裕そうだな桃太郎！　全力疾走しながら!?」
「俺は日本一（予定）の桃太郎！　鬼退治をするために親友のジャック！　浦島太郎！　人食い狼！　おやゆび姫と共に旅をしていた！　此処にくるまで紆余曲折、東西奔走！　詳しくは一話から読め！」
「もはやあらすじの体裁すら保つ気がないとか、本当に太郎一族というのは自由奔放だな！　ハイヤーー！」
「貴様、ここにきて加速だと!?　負けるか！」
手綱を操り、白馬をより一層加速させた三蔵法師に、桃太郎はお爺さん譲りの健脚で迫ります。頑張れ桃太郎！　負けるな桃太郎！　悪の三蔵法師に負けるわけにはいきません。
「うんことどっこいしょおおおーー!!」
「ちがくなぁい!?」
「漏れるッ！」
「お前人としての恥じらいというのは無いのか！」
「人の尊厳を守るために俺がいる！」
「うんこ漏らしそうな桃太郎が決め台詞決めて追ってくるのめっちゃトラウマ！」
それでも白馬は抜けません。桃太郎は考えます。どうしたら追いつけるのでしょう。

「くっそう、段々フリフリ揺れる馬のケツに欲情してきたぞ！」
「貞操の危機！　逃げて、もっと逃げて！　全力で逃げて白馬！」
「ああ、だがしかし！　俺の足で追いつくことは不可能なのか……！」
桃太郎が諦めかけ、白馬との距離が広まっていきます。その時です。
……太郎……桃太郎……聞こえるかい。
「はっ……この声は……！」
あっ、すいません。アカウント間違えました……。
「どうりで聞き覚えが無いと思った！　誰だ貴様！　別垢で語りかけてくるやつにロクなやつはいない！　なぜなら本垢が凍結済みだからだ！　なにやつ！」
ワシじゃ……桃太郎……。
「お爺さん！　お爺さんなのですね！　なにかヒントを!?」
呼んだだけー☆
「クソじじいいいいいいいッ！　この俺の怒りッ！　とくと！　味わうがいい三蔵法師ッ!!!」
「私関係なくなぁいっ!?」
「――例えこの五体、四散と砕け散ろうともッ！　この俺の走りを阻むものあらば木端微塵！　太郎一族究極秘伝！　これこそは初代桃太郎様より直々に伝えられし一子相

伝の足捌き！」

　なんということでしょうか。桃太郎と三蔵法師の距離が徐々に詰められていくではありませんか。その足運びたるやまさにメロスのように。そう、お爺さんの代によって完成されたフォームへと昇華を遂げた太郎一族の究極秘伝。

「邪智暴虐ジャッジメントパシリっ!!」

「昔から思っていたがお前ら太郎一族の必殺技はことごとくがネーミングセンスが死んでいる！　って速すぎるわお前!?　追い抜いてどうする！」

　黄金回転率の比率を保った完璧なランニングフォームによって桃太郎は白馬を追い抜き、天竺を背にして三蔵法師の前に立ちはだかりました。ですが、このままではまたもや白馬の跳躍によって出し抜かれてしまいます。

「ここから先には通さんぞ、三蔵法師！　おとなしく引き返すのだな！」

「ええ、黙りなさい桃太郎！　このままでは「天竺着いた。馬で来たわ」と自撮り付きでネットに投稿できないではないですか！」

「ならばその一文にこう付け加えるのだな！　「太郎一族に妨害されました。マジムカつく。なんなのあの日本一のハンサム」と！」

「謙虚そうに見えてその実欲望ダダ漏れの男！　お前三分前に自分がうんこ漏らしそうな発言したの忘れてないか!?」

「過去とは乗り越えるもの！」
「駄目だこの男！　決め台詞のキメどころ破滅的に間違えている！」
「脱糞、じゃなかった、抜剣！　食らえー！」
「は、白馬ーー!!?」
　桃太郎の手からすっぽ抜けた木刀は、三蔵法師の跨る白馬の喉元を強烈に叩きました。しかも足に引っ掛かり、これにはたまらず落馬します。受け身だけはしっかりと忘れない三蔵法師と、桃太郎が睨み合いました。
「三蔵法師。貴様の旅路はここまでだ。天竺ではなく地獄に行くことだな！」
「この私を同じ地に立たせるとは愚かな太郎一族め。貴方は既に釈迦の掌の上であることを知りなさい」
「釈迦は、巨女なのか。俺はそういうのも――――――イケる！」
「生粋のバカに効く説法を教えて仏様ッ!!!」
　桃太郎が木刀を拾い上げて刀身を抜き放ちます。三蔵法師もまた、徒手空拳を向けて構えました。両者の気力がみなぎり、緊張感が漂います。
「いざ！」
「尋常に！」
『勝負ッ！』

二人の決戦が始まります。その様子は、天竺からもよく見えていました。